
珠巡り

桜咲 雫紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

珠巡り

【Nコード】

N 6 5 3 4 W

【作者名】

桜咲 雫紅

【あらすじ】

数百年に一度、正統継承者が生まれそれぞれが代々受け継いできた珠の封印が解かれる。その瞬間から珠取が始まる。

天を操れる球。

海を操れる球。

地を操れる球。

この珠に選ばれし正統継承者は、十六歳になると同時に通称『珠取』と名乗る一団に命を狙われる。正統継承者は『珠守』とともに珠を守り抜き再び封印しなくてはならない。

珠を全て奪われると先祖が封じた“モノ”が蘇ってしまつらしい。

さて、前置きはこれくらいにしていよいよ珠巡りの始まりです。

プロローグ

パチパチパチ

ガツシャーン ガラガラ

建物が焼けていく音に加え、崩れる音も加わった。この家が焼け落ちるのも時間の問題だろう。

「いいかい。桜、龍護^{りゅうご}」

男が膝を折って話しかけているのは、十歳にも満たない火のせいか瞳の紅い少女と一・二歳年上と思しき瞳の色が濃い少年だ。よく見ると、少女は掌に納まるくらい小さい珠を持っている。色はこの空と同じように漆黒だ。

「この珠を持って今すぐ逃げるんだ」

「嫌だよ。父さんも母さんも皆も、一緒に行こうよ」

少女は泣きながら父の服を引っ張る。少年も辛そうに顔を歪ませている。

「後から必ず行く。約束する。だから今は逃げるんだ。気づかれないうちに」

「やだよ」

「行くぞ。桜」

龍護が桜の手を引く。桜は何度も躓きながら叫んだ。

「離してッ。離してよ！龍兄」

バタバタ暴れると龍護は血を吐くような声で

「行かなきゃ・・・いけないんだ！」

桜はギュッと珠を握り締めた。瞳には今にも零れそうなほど涙が溜まっている。

「絶対追ってきてね！！！」

桜の悲痛な叫びも建物の崩れ落ちる建物の音にかき消されていく。

「正統継承者は逃げたか」

「追うぞ。あの珠を全て集めるのだ」

「天空家末裔を追え！」

涙で滲んだあの光景を、私は生涯忘れないだろう。

深く強く心の深奥に刻み込まれたこの光景を。

そして、突きつけられるだろう。

自分の命は自分の大切に思っていた人々の命と引き換えに生かされたのだと。

「・・・ツ・・・」

何故皆は私を逃がすために命を捨てたのだろう。

何故私は正統継承者に選ばれてしまったのだろう。

何故大切な者だけこの手をすり抜けていくのだろう。

「もうやだ・・・」

思わずもらしたこの言葉は本音だ。もうこれ以上自分のせいで自分の大切な居場所^{ひとたち}を亡くすなど耐えられない。

「大丈夫だ。俺は絶対に死なない。や・・・誓うから」

約束すると言い掛けて別の言葉に言い換える。だが、今の桜にはどんな言葉も届かない。音として耳に届いたとしても心が拒絶しているのだ。それを知りながら龍護は呟く。

「お前は俺が護つてやる」

第一章 “空の珠”を持つ者

「桜！一気に行け。道作るから」

「りよゝかい。綾、ミスるなよ」

「そつちこそ」

軽口を叩きながらゴールを目指してドリブル開始。こうなっただけもう止まらない。

ダムダム

蒸し暑い熱気に包まれた体育館にドリブル音が木霊す。

一対一の状態から相手を抜き、綺麗な放射線を描きゴールに向かっていくボール。

パシュ ピー

「二十対二十二。勝者一年」

歓声が上がリ、一年チームははしゃぎまくる。桜はうるさそうに顔を顰めながらもどこか嬉しそうだ。

「桜、あんたホントに未経験者？詐欺じゃないの？」

二年の先輩達が順繰りに瞳が紅玉色の桜と呼ばれた女の子の今は薄い黒の髪をわしゃわしゃかき回す。桜は「背が縮んじやいますよ」と抗議の声を上げているが、聞いちゃいねえ。

「はあ、疲れた。キャプテン、休憩の号令を出して下さいよ。疲れました」

キャプテンこと朝霧 美穂は呆れたように肩をすくめて

「わかったわかった。十分間休憩」

「さっすがキャプテン。物分りがいい」

ポカ리를飲みながらキャプテンの背中を叩く。桜も壁に寄り掛かりながら水分補給をしつつ、時計を見る。そろそろか。

「桜！行くぞ」

来た。一般の人が思う『カッコイイ』を体現したような黒い瞳と黒い髪の男が腕を組み、柱にもたれかかっている。

「キャプテン、私早く帰らないと」

『キヤーツ!!! 龍護く〜ん。こっち向いて〜』

うわあ、出たよ。龍兄の追っかけ集団。ということは……

「陽菜^{ひな}の方向いて〜」

来たよ。龍兄追っかけ常習者の入江 緋奈、瞳が黄色で髪が金髪の
一歩手前。今日も一段とすごい格好だ。こんな奴に好かれて龍兄も
可哀相に。

「桜！何ボケーツとしてんだ。帰るぞ」

「待つてよ。着替えなきゃ」

「一分ですませろ」

無茶言うな！と言いながら更衣室に入る。

二分後、黒のスカートに半袖のワイシャツ。その上にアイボリーの
ベスト赤と白のラインが入った青いリボンといった涼しげな格好で
出てくる（男は半袖のワイシャツ、黒いズボンアイボリーのベスト
青いネクタイという格好）。と龍護は一言

「遅い」

「うるさいなあ。それでも急いだんですよ〜だ」

鞆を龍護に向かって投げて靴を履く。その間も『龍護く〜ん』やら
「陽菜の龍〜一緒にか〜えろ」等の黄色い声が飛び交う。鼓膜が破
れそうだ。

桜が龍護に駆け寄ると、陽菜が龍護の自転車の後ろに乗っていた、
我が物顔で。

ウザッ、てか退けよ。

思わずそう言いかけて慌てて口を押さえる。

「お前ウザいよ。てか邪魔。退け」

あゝあ。言っちゃった。

陽菜は悲劇のヒロインのように涙を流しながら「龍・・・酷い」

「酷くて結構。俺らは急いでんだ。桜、さっさと乗れ。こんなのに
構ってたら千夏^{ちか}と翔^{しょう}に迷惑がかかる」「それもそうだね」

桜が乗ったのを確認した瞬間、物凄い勢いで自転車は去って行った。

「桜と龍、遅いな」

「しょうがないよ。二人とも部活やってるんだから。気長に待とうよ。お兄ちゃん」

「俺だつて龍と同じ部活やってるよ。お前だつて弓道部じゃんか」

腹減ったと愚痴りつつ目の前の料理に手を伸ばす。髪は薄い茶髪で瞳はブラウンの千夏は、素早く料理を髪が焦げ茶で瞳が夕空色の翔太の手の届かないところへ避難させて

「つまみ食い禁止っていつも言ってるでしょ」

「ケチケチすんなよ〜いいじゃんか」

「ダメなものはダメ」

そうこうしているうちに時刻は七時になった。

「今日はいつもより遅いね」

「命日だからな」

「そつか。もうあの日から六年経ったのか。紅蓮の夜、七月十五日から」

「わわっ」

荒れ果てて草が好き勝手生えている階段を上っていく二人。今の声は草で足元が見えず足を踏み外した桜の声だ。

「ったく。なにしてたんだ、お前は」

龍護が空に伸ばされた桜の手を掴む。桜は子供のように頬を膨らませ

「どーもありがとう」

「どういたしまして」

人の悪い笑みを浮かべてる龍護。桜はその笑みに舌を出す。それから一分後、ようやく目的地に着いた。

桜は九年間。龍護は十年間過ごした天空家跡地だ。その天空家も桜と龍護だけ

黙って立ち尽くす二人。ここで二人は大切な者を亡くしたのだ。言

葉など出るはずがない。桜は紅い太刀の形をしているネックレスを握る。いまでも鮮やかに甦る言葉がある。『これはお前を守ってくれる大事なモノだ。肌身離さず持つていなさい。この珠と共に』
「はい。父さん」

首にかけている紐を引っ張り出し、その中から今の夜空と同じ闇に包まれた珠が出てきた。それを両手で握り締め瞳を閉じる。『・・・の・・・』

はっと目を開ける。いつだったか自分の名前の由来を聞いたときに言っていた言葉だ。

『あなたの名前の由来？そうね・・・桜はね、暖かすぎる場所では咲かないの』

不思議そうに首を傾げている桜の頭を撫でながら続ける。

『寒さに必死に耐えて、耐え続けてそれでようやく綺麗な花を咲かせるの。そして、一瞬で儚く散っていく。私はそんな桜の花が大好きなの』

『よくわかんない』

『桜の身にも辛い出来事が降りかかる時が必ず来る。でもね、その辛さを乗り越えて綺麗な花を咲かせて。そして、出来れば桜にとって大切な居場所ひとたちを見つけ。桜にとって大切な居場所ひとたちを見つけれたら、その居場所をずっと護りなさい』

『？はい、母さん』

その時は意味がわからなかったが、大切な人達が出来た今ならわかる。

階段を下り、帰りながら龍護に話しかける。

「龍兄」

「ん？」

「私、美優ちゃん達大切だよ」

「そうだろうな。あいつらといえると楽しそうに笑うもんな、お前」

「美優ちゃん達を護りたいよ」

「そうか・・・お前もようやく護りたい存在が出来たか」

後半は口の中で呟く。月の光が二人を照らしていた。

七時半。

「ただいがほ……」

龍護の語尾が訳のわからない言葉とすりかわった。原因は玄関で仁王立ちしている人物と関係がありそうだ。

「遅いッ！今何時だと思ってんだ！バカ兄妹」

「だからって……」

龍護は額を押さえながら怒りの滲んだ声を出す。背からは怒りの炎ほむらが立ち上る。固く握り締めた拳など今にも殴りかかりそうだ。小刻みに震えている。

「辞書投げる奴がどこにいる！！バカ翔」

「ただいま。翔兄」

桜が龍護の後ろから顔を出す。理由は簡単。龍護が百七十五センチ。桜が百六十センチ。身長的にそうしないと見えないのだ。

「お帰り、桜。ずいぶん遅かったけど寄り道してたの？」

千夏がりビングから顔を覗かせて訊ねてくる。桜は靴を脱ぎ捨て鞆を放り投げながら

「バカ兄貴が道間違えやがってさ。散々な目にあった」

「誰がバカ兄貴だ」

龍護が鞆を桜の頭に振り下ろす。

ドスッ

もろに決まった。

桜は瞳に涙を浮かべてしゃがみ込む。龍護は勝ち誇ったように嘲笑する。

「妹いじめてなに喜んでんだよ。大人気ないぞ、龍」

翔太が龍護の肩に肘を置いて注意する。龍護は眉間にしわを寄せて翔太の顔に肘を入れる。

「ハイハイ。玄関で揉めてないでまずは夕飯食べようよ」

「そうだった。やっと夕飯食えるんだ」

「今日は千夏が当番か。なに作ったの？」

「お兄ちゃんのリクエストの親子丼だよ」

その言葉を聞き、龍護と桜は争うようにリビングへ走る。千夏は苦笑しつつ

「ちゃんと手を洗ってね」

「ハイハイ」

「返事は一回」

「へーイ」

午前七時。ピピピピピピ。

目覚まし時計のなる音で目が覚めた。

「朝か……」

未練がましく布団に横たわる体を無理矢理起こし、伸びをする。

手早く制服に着替え、鞆を引き摺りながら階段を下りる。洗面所に寄りさっぱりしてからリビングへ。

「はよ」

リビングに入り挨拶すると、キッチンから千夏が笑顔で「おはよう、桜。もう少しで弁当出来るから寝坊助共を起こしてくれない？」

「オッケー。朝食のパンテーブルに出しといて」

わかった。という千夏の声を背に再び二階へ。階段を上って一番端にある翔太の部屋に行き、一応ノックをして

「起きろ」翔兄。朝練ないからっていつまで寝てるつもり」

電気をつけカーテンを開けると、翔太は唸りながら身を起こす。

「もう朝か……寝足りない」

「さっさと着替えて歯磨いて朝食食べな。千夏が待ってるよ」

「あいさ」

気の抜けた返事をして立ち上がる。次は龍護の部屋だ。翔太の部屋の向かい側が龍護の部屋だ。ちなみに龍護の隣が桜で、その向かい側が千夏。

龍護の部屋はノックなしで入る。電気をつけカーテンを開け

「おら、さつさと起きろ。バカ兄貴」

容赦なく布団を引っぺがし揺さぶる。翔太とはえらい違いだ。龍護は寝ぼけながら桜を見て

「……おふぁよう、桜」

「制服に着替えて歯磨いて朝食食え。学校遅れるよ」

「ハイハイ」

適当に返事をし、桜の目の前で着替え始める。桜は龍護の腹に蹴りを決め

「私が出てったから着替えろ！！この変態兄貴」

捨て台詞と共に扉を力一杯閉める。顔が若干赤いが、怒りのせいということにしよう。

一時間後。

「おはよう。桜ちゃんと千夏ちゃんとお兄さん方」

「はよゝス。四人とも」

「おはよう。渚、美優ちゃん」

桜は自転車を引きながら二人がいる方へ走る。

「真海は相変わらず眠そうだな」

翔太は苦笑いを浮かべている。渚は「そんな事ないですよ」と言っている。が言ったそばから大あくび。これじゃあ説得力に欠けるとこの上ない。

「ここで話してないで学校行かない？」

千夏の一言で一同は学校へ向かう。

私の名前は天空 桜。三珠高校一年で“空の珠”に選ばれし者。まあ正統継承者って事かな。どうやって継承者かどうか見分けるのかというと、正統継承者は十六歳になると左腕に紋章が現れる。

天なら翼、海なら波、地なら双葉、といった感じ。

「しっかし暑いな」

私の隣で文句を言っているのは兄の天空 龍護。私立三珠大学付属

三珠高等学校二年。龍兄とは言ってるけど血縁関係はない。口が悪く、性格も悪い。髪も瞳も黒。

「文句言ってる暇があんなら、一秒でも早く学校に着くようにしろ」
そう言って龍護を追い抜かしたのは夕空 翔太^{しょうた}。私立三珠大学付属三珠高等学校二年。瞳は夕空色で髪は焦げ茶。龍兄の親友兼悪友。龍護とあり得ないほど気が合う。

龍護は抜かされたのが悔しいらしく、スピードを上げて抜かし返している。バカ兄貴二人による無意味競争が始まった。信号が変わったので桜たちは自転車を止める。

「行っちゃったね。お兄ちゃん達」

呆れたような顔をしつつ私の横に自転車を寄せてきたのは夕空 千夏。私立三珠大学付属三珠高等学校一年。私の親友兼悪友。瞳は薄い夕空色で髪は薄い焦げ茶。いつも微笑んでて可愛いし優しい。ぽけーっとしてると横から

「桜ちゃん。信号変わったよ」

「桜がぼけーっとしてると笑いを誘うね」

慌てて信号機を見ると歩行者信号は青に変わっている。自転車を漕ぎ出す。

今私に信号が変わったことを教えてくれたのが菊地 美優^{みゆう}。私立三珠大学付属三珠高等学校一年で“地の珠”に選ばれし者。今は翠がかって見える髪。普段は黒色。瞳は翠玉。マイペースで絵が上手い。幼馴染。

私がぼけーっとしてると云々と言ったのは真海 渚^{なほ}。私立三珠大学付属三珠高等学校一年で“海の珠”に選ばれし者。今は青みがかって見える髪に瞳は青玉。髪は普段は黒だ。冷静で腹黒。でもなぜか親友関係にある。我ながら謎だ。

あと三人ほど紹介したい人がいるけど学校に着いちゃったからまた後で。

自転車を自転車置き場に止め、昇降口へ歩いていくと龍護と翔太が

待っていた。

「遅いぞ、お前ら」

「ちゃんとして来いよ」

「無茶言わないでください。桜と千夏ちゃんならまだしも私と美優ちゃんは運動系全般苦手なんですから」

渚が若干息を乱しながらぼやく。その横で美優はお茶を飲んでいる。
「まあまあ。早く教室行こうよ」

桜が渚の肩を叩く。渚は大きく深呼吸をして息を整えてから「そうだね」とだけ言い下駄箱に向かう。私と千夏と美優と渚は1年A組の下駄箱。龍護と翔太は二年E組の下駄箱だ。

階段を上っていくと上から声が降ってきた。

「おっはよ」。龍護君と翔太君・・・と桜ちゃんと千夏ちゃんじゃん。おはよ」

「山下先輩。おはようご」桜、こんな奴にいちいち挨拶なんかしなくていいよ」

翔太が桜の言葉に被せるようにそう言い捨てる。龍護は引き攣った笑みを顔面に張り付けている。

私に話しかけてきた人は山下 大地先輩。髪は茶髪で、瞳は朱色。なぜか翔兄とはそりが合わない。私もちよつと苦手だけど。

「ほら、お前らはさつさと教室に行けよ」

「わかった。じゃあまた昼休みにね」

手を振りつつ四階へ向かう。

第二章 桜と仲間達

教室に着き、ドアを開けて自分の席に荷物を置く。すると目の前に影がさした。顔を上げると、見知った顔だ。この学校の半数以上の女子生徒が想いを寄せる男子。

「おはよう、恭哉」

と挨拶すると

「おはよ、遅かったな。寝坊か？」

「私じゃないけどね」

「またお前の兄貴か」

口元を隠して笑っているこの男。天空 恭哉^{きょうや}。髪は明るい茶髪で、

瞳は赤色。幼馴染だ。何故か異常に女子に人気がある。告白が絶えないそうな……。だが今まで誰とも付き合ったことはないらしい。隠し事をしていると何故か必ず問い詰められる。以外と鋭い。中間テストの結果は二位。期末ではどういう結果になってるか楽しみだ。龍護と翔太と同じように日々追っかけ女共に追われている。ファンクラブも出来てるそうな……。龍兄とはいつも喧嘩している。

「せ・ん・ぱ・いでしょ？また外周させられるよ。天空」

「しょうがないよ。学習能力というものが欠落してるんだから」

桜の後ろから渚と千夏が恭哉に注意する。続いて美優も

「違うよ、渚さん、千夏ちゃん。天空君は外周がしたいんだよ」「したくないからッ」

即座に否定するが二人はまったく聞く耳を持たず「じゃあ龍護さんに教えてこよう、行こう美優ちゃん、千夏ちゃん」「いいよ」「親切だね、渚さん」

「勝手に話を進めんなあ」

恭哉の訴えも空しく、三人が再び教室の外に足を踏み出した時

「うおっと、あつぶね」。って渚と天空と菊地じゃん。おはよう。んで、どしたの？こんなところ（出入り口）で突っ立って」

「おはよう、悠紀君」

「男バスは朝練あつたんだ。お疲れ様、悠紀君」

「おはよう。朝練お疲れ様、悠紀」

渚と千夏と美優にぶつかりそうになったこの人、名は真海 悠紀^{ゆき}。髪は漆黒で瞳は空色、中学からの親友だ。新入生代表に選ばれ、一学期中間テストの結果でぶつちぎりの一位を獲得した頭の良い親友根は真面目。恭哉とは犬猿の仲。生徒会書記。

「待ってよー悠紀君。足速すぎ」

遅れてやってきたのは菊地 一夜。髪は黒で、瞳は深緑、額に小さな傷がある。気弱で頼りない幼馴染。でも、やる時はやるしっকার者。

「おはよ、一夜。えらく疲れてんな・・・男バスってそんなにきつかったっけ？」

桜が記憶を探りながら訊ねる。練習量は女バスより多かったが、そこまできつくなかったはず。疑問はすぐに解決した。

「体育館からここまで（教室塔）まで結構遠いじゃん？そこを遅刻しないよう全力で走ってきた」

悠紀が爽やかに言う。渚と美優が小声で「体力馬鹿」「違うよ、渚さん。筋肉馬鹿だよ」と言い合っている。文化系の部活動の二人にしてみれば、ここから教室塔まで走る体力は生憎持ち合わせていないのだ。

キンコーン

「起立、礼」

『おはようございます』

日直の号令と共に生徒達が挨拶をする。

「おはよう。今日からテスト返しが始まるが、ちゃんと問題用紙は持ってきたか？国語、保健、理科のだぞ。以上かな」
そう言う礼もそこそこに歩いていった。

「最悪だ」。よりによって保健が返ってえくるなんて」

桜は机に突つ伏す。保健のテストは記号問題も語群問題もなかった。更に加え、桜は保健の勉強を当日やったのみ。赤点をとつてもおかしくない要素満載だ。

頭を抱えつつ唸っていると、頭上からクスツという笑い声と共に「大変そうだね。まあ私は国語が返ってくるから気分がいいんだ。今回こそ百点満点取ってやる」

「渚ちゃんは国語トップだもんね」

「渚さんは頭いいからね。私なんか全滅だよ」

顔を上げると渚と千夏と美優が立っていた。桜は落胆の滲んだ声で「三人とも頭よくていいよねえ。私なんか馬鹿すぎて即退学になるかも」

「なに言ってるのさ、桜ちゃん。私の方が即退学だよ。頭悪すぎて」

「そんな事ないよ。美優ちゃんは学年順位十位だったじゃん」

「そうだよ。美優ちゃんは頭いいよ。なんだって一学年中十位なんだから」

千夏と桜がうんうん頷きあっていると、美優が

「……一学年中三位の千夏ちゃんと四位の桜ちゃんに言われてもねえ」

「あんなのまぐれだよ。たまたま社会と理科がよかっただけで」

「私もだよ。偶然数？と英？がよかっただけで……」

二人は困ったように笑いながら頭を掻く。そこへ

「今回は俺が勝つ。覚悟しとけよ。悠紀」

「負け犬の遠吠えかい？見苦しいね」

「んだと」

「二人とも、やめなつて」

言い合いながらやってきた恭哉と悠紀。その二人の後ろには言い合いを止めようと無駄な努力をしている一夜がいる。

「やめな、悠紀。時間の無駄遣いだよ。それにそんな恭哉に付き合つてると悠紀までバカになつちゃうよ」

渚が冷たく言い放つ。恭哉は指を鳴らしながらにつこりと笑みを浮

かべ

「いい度胸だね、真海さん。数？赤点まであといつて」

すねを押さえてぴょんぴょん跳ね回る。渚が恭哉のすねを蹴ったのだ。力一杯。

その格好をみて思わず吹きだした桜と悠紀と美優。一夜は恭哉の格好を見て笑いそうになったが、さすがに気の毒と思ったのか咳払いに変える。千夏は吹きだしこそしなかったが口元が笑みの形になっている。

「今度その続きを言ったら・・・腹に決めるから」

「渚、ナイス。今度アイス奢ってやる」

「どうも、三段ね」

結託している二人。恐ろしいコンビだ。この二人だけは敵に回したくない。

「おい、その七人。座れ！テスト返し始めるぞ」

十一時。

キンコン

「やっと終わった」

ため息と共に言葉を吐き出す。それと同時に私の人生も終わりそうだ。十五年か。長かったような短かったようドカッ

「痛って」。・・・なにしゃがんだよ、渚」

ギロリと睨みつける。桜の思考を遮った音の正体は渚の鞆だ。もっと正確に言つと、渚の鞆が桜の頭に当たった音だ。

「人の昼寝の邪魔しやがって・・・」

肩をふるふる震わせて渚に殴りかかろうとした瞬間、桜の目の前に美優が・・・

「うおっと・・・危ね・・・」

ほっと息を吐き出す、危うく美優を殴り飛ばすところだった。ふう。

「あつ桜ちゃん。今日は部活あるの？」

「いや、ないよ」

「そうか、それは好都合。俺らのとこ来い」
「はっ？」

突如割り込んできた声の主は、恭哉だ。ということは

「全力でお断りさせていただきます」

顔の前で×印を作ってみせる桜。

「いいじゃんかー暇なんだろう？」

「暇だけど嫌だ」

「なんだよ。マネージャーの癖に」

マネージャーという単語に唇の端を引き攣らせる桜。確かにサッカー部のマネージャーだ。やるといった覚えはこれっぽっちもないが、「私がいつサッカー部のマネージャーやるって言った？無理矢理マネージャーにさせられただけなんですけど」

「いいからいいから。行くぞ」

腕を掴まれ強制連行。桜は必死に抵抗しながら渚に叫ぶ。

「美優ちゃんは今日部活ないけどお前はあるんだろ！？一緒に帰ろう。四時半に正門で待ち合わせな〜！」

「いいけど・・・サッカー部って七時までやってるんじゃない・・・」

「逃げる」

きつぱり言い切った桜。桜はこうと決めたことは絶対やり抜く。ということとは必ず五時には正門に来るだろう。

「わかった！四時半に正門で」

渚と別れ、階段を下りながら桜はずっと黙り込んでいた。この後アイツに会うと思うだけでテンションが下がる。いや、人生の運氣も下がる気がする。

「どうしたんだよ。さっきからずっと黙り込んで」

恭哉が顔を覗きこんでくる。いつもなら「なんでもない」とか「うつさいなあ。私の勝手でしょ」等の言葉を返すのだが、今はそんな気力すらない。自然とため息が出る。すると、恭哉は桜の額を触り「熱でもあるのか？お前がそんなに沈んでんのも珍しい」

恭哉なりに心配してくれているらしい。桜は作り笑いを顔面に張り

付けて

「……っ何でもなし。ちよつとテストの結果が悪くて」

いつもより元氣のない声だ。でも今はこれで精一杯。クラスメイトなら騙せる程度の笑顔と声だろう。恭哉も多分気づかな「お前……やっぱり変だぞ。無理すんな」

「そんなことないよ」

作り笑いを見破られたことに驚きつつもなんとか否定する。これ以上心配かけたくない。

「怪しい」

疑いの眼差しを向けられるがここで「やっぱ気分悪い」等の事を言ったら龍護の耳にも入る可能性大だ。それだけは避けなければ。とりあえず

「速く部活行かないと先輩に怒られるんじゃないの？」

話を逸らすことにした。これ以上追求されたら言ってしまうそうだ。

「そうだった。早く行かねえと」

そう言つて走り出そうとして、まだ私の手を掴んでいることに気づき

「お前、今日は早めに帰つて寝ろ。元氣ないと逆に怖い」

酷い物言いだ。桜は無言の抗議をする。恭哉は微笑して

「そうそう。その方が桜らしい」

上手く乗せられたようだ。

「じゃあ俺行くわ。氣をつけて帰れよ」

そう言いながら凄いスピードで走り去つていった。残された桜はさて、どうしたものかと考え込む。お腹も減つたしどこかでお弁当食べようか。それとも家に帰ろうか。あつ、待った。渚と約束してたんだっけ？ 確か天文部は自由参加だったはず。

「よし、渚と一緒に飯食つて一緒に帰ろう。決定」

こうと決めたときの桜の行動速度は速い。あつという間に特別等の屋上にある天文部の部室へと走つて行つた。

所変わつてグラウンド。

「なあ、おかしいと思わないか」

グラウンドの隅に植えてある木の下で弁当を食べている男二人。声の主は翔太だ。

「何が？」

「何がって・・・お前も気づいてんだろ？真海が十六になったのにアイツ等が動かないなんて」

それは俺も思っていた。アイツ等が十六になった真海を狙わないのはおかしい。それどころか見張ってもいない。いったい何を考えてるのやら。

「真海が十六になった時から俺達六人は真海と桜と美優の誰かと一緒に帰るようにしてきた。なのに今まで誰もアイツ等と出会ってない」

「そうだな。だがもう一つ問題がある。真海は十六になったのに紋章が現れてないし、珠も目覚めてない。この事と真海が狙われない理由と何か関係があるんじゃないか？」

二人は重いため息をついた。わからない事だらけでイライラする。

無言で昼食をかきこんでいると、恭哉がやってきて

「こんなとこにいたんですか。探しましたよ」

「遅いぞ、恭哉。外周させるぞ」

「それだけは勘弁してください」

恭哉は顔の前で手のひらを合わせる。そして龍護が「まあいいだろう」と言っただのを聞いて腰を下ろす。弁当を食べつつ空を見て

「今日も暑いつスね。そういえば先輩達テストはどうでしたか？」

「まあまあだったよ」

龍護が着替えながらどうでもよさげに答える。翔太は苦笑して

「俺はちよつとやばかったかな。お前は？」

「俺は結構よかったですよ。今回こそ悠紀じゃなくて俺が学年順位一位になる」

拳を握る恭哉。今回こそあの偉そうな面をぶん殴ってやる。

意気込んでいる恭哉はさて置き、二人を戻す。

「とにかく何かあるかわかんねえし警戒を強めところ」「それが妥当だな」

「ところで恭哉。桜は？」

龍護がまだ悠紀への意気込みを熱く語っている恭哉に問うと、恭哉はガッツポーズの格好で一時停止をし、答える。

「桜なら今頃・・・」

第三章 襲撃

「よし、今日は誰もいないみたい。久々に静かに過ごせる」

ここは特別等の屋上。天文部の部室の前。塀に寄りかかった渚は風にあおられる髪を鬱陶しそうにかき上げ弁当を広げる。たまにはこうやって静かに食事を取るのも悪くない。むしろ一人のほうが気楽だ。

「いただきます」ドタドタドタ

渚のいただきますと誰かが階段を駆け上がってくる音が重なる。渚は手を合わせた格好で止まり、扉に目を向ける。こんなに騒がしくやってくる人物を私は二人しか知らない。一人は男共と一緒にショッピングに行くとか言ってたから、来るのは桜しか思い当たらない。渚がそう思った瞬間ドアが蹴り開けられ、桜が渚に手を振り

「よくす、渚^{なぎ}。一緒に昼飯食おうぜ」

予想的中。いや、予想より騒々しい登場の仕方だ。せめてドアぐらい手で開ける。なんのための取っ手だよ。お前の知識は原人以下か。そう言つてやりたいのを堪え、短く一言

「何しに来たの？」

「まあまあ、そう冷めた目で見んなって。私はただ一緒に昼飯食いたいと思つてさ、お前と」

「サッカー部の方は良い訳？」

桜は妙にテンションの高い声で「いいのいいの。さつ、一緒に昼飯食つてさつさと帰ろうよ」

「私、部活あるんだけど・・・」

無駄だとわかつていながら一応言つてみる。だいたい帰るんなら一人で帰れ。小学生かお前は。

渚の胸中を知りもせず桜はにつこり笑つて

「自由参加なんだろう？サボっちゃまえ。お前は私と帰るっていう用事があるんがから」

どんな用事だよ。思わず出掛かった言葉を必死に飲み込む。もう何を言っても無駄だ。

何も言わず昼食を食べ始めた渚を見て桜は満足げに頷き

「私も飯食うか。あゝ腹減った」

女性にあるまじき言葉遣いをしつつ渚の向かいの塀に持たれる。渚の隣に座つてもいいんだが、両方とも荷物が置いてあるのだ。退けるのも図々しい気がする。二人は黙々とご飯をかきこむ。なんとなく話しづらい雰囲気だ。

「桜」

渚は小さく、だがはつきりと桜の名を呼ぶ。桜が顔を上げると、渚の左側の荷物が右側に移っている。渚はそっぽ向きつつ

「こっち空いたよ。来たいなら来れば」

「嫌なら行かないけど？」

「いいから来い」

どっちなんだよ。心の中でばやきつつ渚の左側に腰を下ろす。

「ねえ、質問して良い？」

渚が躊躇いがちに聞いてくる。桜は目をパチパチさせながら

「いいよ。何が聞きたいの？」

「あなたは“空の珠”に選ばれし者なんだよね？」

「ああ、そうだよ」

事もなげに答える。隠す気もないし、どうせ渚も知っている事だし。そうだ、知っているのに何で今更再確認する必要が……。

「嫌だと……思ったことは……ない？」

「……はっ？」

唐突な質問に首を傾げる。何が言いたいんだ？こいつ（なぎさ）は「逃げたいと思ったことはない？」

「……一回だけなら」

そっか、渚は知らないんだ。私の両親がいない理由。まあ話してもいいんだけど、あんまり話したい内容じゃない。

「そっか……私もあるよ。じゃあもう一つだけ」

黙って続きを待つ。過去を聞かれたらどうしよう。そんな思いが脳裏を過ぎる。だがその心配は杞憂に終わった。

「一番、怖い事は？」

「怖い事？」

「そう。目の前で起こってほしくないことは？私は親しい人の血が流れること」

俯き目を閉じる。私の目の前で起こってほしくないこと・・・それは・・・

瞳の奥で紅蓮の炎が揺らめく。その炎に包まれていく父と母と他の人達。それからもう一人、いつも優しく笑ってくれたあの人の笑顔が過ぎる。

―もう二度と目の前で大切な人達を、亡くしたくない―

「もう二度と・・・」

微かに声が震えているのが自分でもわかった。体も震えている。その震えを抑えるかのように自分の体を抱き、声を絞り出す。

「もう二度と・・・大切な人達を亡くしたくない」

自分に誓うよう呟く。

『それがお前の心か』

聞いたことのない声が耳にふれる。目を見開き左右を見回すが、渚しかない。

「どっとうかした？」

突然きよるきよるし出した桜を驚いたように見つめる渚。桜は取り繕うように笑って

「なんでもない。さて、早く飯食って帰ろう」

「そうだね」

それから、先ほどの暗い会話を記憶から消そうとするように楽しい会話になった。

「よつし、帰るか」

昼食を食べ終え、鞆を背負い帰る準備万端。渚の方を見ると「そっちも準備出来たみたいだな」

「まあね。じゃ、帰ろっか」

時刻は十二時ちょうど。正午を告げるチャイムが鳴り響く中、二人は昇降口で靴を履いていた。

「日差しが強いな。帰るまでに溶けたらどうしよう」

「溶けるわけないじゃん。頭の構造大丈夫？」

「失礼なことをいう奴だ。喻えだよ。た・と・え」

ふん、とそっぽを向くと、一言

「子供みたい」

「なんだと・・・」

桜は子ども扱いされるのが大っ嫌いなのだ。ギロツと睨みつけるが、渚はまったく動じずスタスタ歩いていく。

「ちっ」

舌打ちしつつもついて行く。渚は性格的に合わない気がする。なのになぜ親友関係にあるのか疑問だ。まあどうでもいいや。

自転車置き場に着き、鍵を開け自転車に乗る。桜は暇そうに欠伸をして

「帰りに花咲スーパー寄りたいんだけど、いいかい？」

「どうぞ。私は特に用事ないから」

「じゃ、決まりな」

お先にどうぞ。と渚を先に行かせる。まっこんなことしてもすぐに追い抜かしちゃうんだけど。

「あのさ、歩いて帰らない？自転車引きながら。たいして時間変わらないし」

「なんで？」

「だって自転車じゃ桜速過ぎるんから・・・追いつけない」

てな訳で、歩いて下校することになりました。ったく、めんどくせまあいिया。こういうのも悪くない。最近部活が忙しくてゆっくり

してられなかったからな。空を眺めつつそんな事を考えていると、横から渚が

「私、十六になったのに紋章でないんだ」

唐突な言葉にどう反応して良いかわからず、黙って聞き手に回る。渚も何か言っただけいいわけじゃないだろうし。多分。

「珠も目覚めないし・・・私、ホントに正統継承者なのかな。護ってもらう価値、あんのかな」

「お前が正統継承者じゃないなら、他の誰が正統継承者になれるってんだ。お前は正統継承者に選ばれたんだ。その事は誰にも変えられない事実。だからそこから逃げずに立つて。そしたらお前を認めてくれる奴がいるから」

昔一度だけ私も渚と同じことを言ったことがある。そしたら龍兄がそう言ってくれた。あのときの事を思い出しながら渚に言う。

渚は少し考え込み、小さな声で

「逃げずに立つて・・・か」

思う事があるのかそう呟き、晴れ晴れとした顔で微笑み

「出来るかわかんないけどやってみる」

「・・・私はお前のこと認めてるけどな」

ついぼろつと声を漏らしてしまった。渚は喜色満面で抱きついてくる。

「離れる」

じゃれ合いながら信号を渡る。あとは住宅街を通るだけだ。

好きな歌手について渚があつく語っていたとき、桜は何かを通り抜けたような感覚を覚えた。抵抗も何もなかったので思わず素通りしてしまっただけ、奇妙な違和感がある。

（？なんだ）

足を止め左右を見回すが特に変わった事はない。気のせいかな？

「桜？どうかしたの。きよろきよろして」

「なんか違和感ない？」

「はっ？・・・ん、言われてみればなんとなく・・・」

二人はうんと唸り、考えていてもわからないので家路を急ぐ。よくわかんないけど急いで帰ったほうがいいかも。

先ほどよりやや早足になった二人を、感嘆したような顔をしているフードを被った男が電柱の上に立ちつつ見ていた。

まさかこの微妙な差に気づくとはな。さすが珠に選ばただけのこととはある。それなのになぜ珠は目覚めない。男の目的はその理由を確かめることだった。

「さて、どうしようかな」

のんびりした口調で歌うように呟く。やはり十六になっている真海渚を狙うのが妥当か。

「きゝめた」

男の姿はその場から掻き消えた。

同時刻。

「十分間休憩〜！」

キャプテンの指示により、各々は日陰に行ったり飲み物を飲んだりタオルで汗を拭いたり。そんな中、龍護は重いため息をついていた。理由は

「陽菜の龍、飲み物とタオル、はい、どうぞ」

「・・・なんでお前が持つてんだよ。てか毎回こういうことしなくていいから。ウザイ」

「きやゝ龍が照れてる」

「照れてねえし。物凄い曲解だな」

陽菜から飲み物とタオルを奪い、翔太と恭哉に

「休憩中だけどっか行かね？精神が持たない」

「いい案だ。桜んとこ行こうよ」

「そうと決まったら」

三人は砂埃を上げつつ走っていく。マラソン大会一位、二位の實力

はだてじゃない。

あつという間に屋上に着きドアを開ける。が

「誰もいねえ」

桜の姿はおるか渚の姿さえない。部室の鍵は閉まっている。てことは

「帰ったのか」

「ヤバくねえか？桜達の力は目覚めてないんだぞ」

「っ追うぞ」

龍護の声を合図に三人は桜達の後を追う。

（間に合ってくれ）

龍護達が必死に走っているのを露知らず、桜と渚は数学の文句を言っていた。

「あの外国語の綴り見たいのを覚えるとか無謀すぎんだよ」

「そうそう。あんなの教わったって使い道ないっての」

「だよね〜。よくわかってんじゃん、桜」

「なんか妙に息が合うね。怖いわ」

「どういう意味？」

「怒んなって」

渚の頭をわしゃわしゃかき回す。渚は迷惑そうに眉を寄せる。その時ひゅん

何かが風を切る音が聞こえた。桜は音のしたほうに視線を向けると

（何あれ・・・ヤバっ）

桜の視界に移ったのは、正確に自分達目掛けて飛んでくるブーメランの様な物だった。ただし、太陽の光を弾く刃つきの。

反射的に渚を右に押し、一緒に避ける。だが、一瞬遅かった。びりっ

服が破れる音が鼓膜にぶつかる。左肩の袖が破られた。

「っ・・・」

服が破れた箇所から血が滲んでいる。浅く斬られたみたいだ。傷口を押さえると手のひらに血がつく。痛って〜。

「いきなりなにすん・・・桜・・・血が・・・」

左肩の袖が白から鮮やかな赤へと染まっていく。桜はポッケからハンカチを出し、きつく縛る。ナイフで指を切ったこと計五十回以上、車に撥ねられたこと計二回、自転車同士でぶつかった事計十回以上、骨を折ったこともある。こんなのだって事ない。

自分に言い聞かせ、ブーメランが飛んでいった方向を見る。そこには逆光により誰かはわからないが人間が立っていた。（まあ、逆光がなくてもフードを被ってるから顔は見えないけど）人の家の屋根の上に堂々と。

渚も桜の視線を追い目を細める。

「誰？」

「知るか」

短く返し、ブーメランを投げてきた人を観察する。まったく挨拶なしに襲ってくるなんてなんて危ない奴だ。

第四章 目覚め

「今のをかわすなんて・・・やるじゃん。“空の珠”に選ばれし者、天空 桜」

「何でそれを・・・」

そのことは私を含めた九人しか知らない事だ。もしかして・・・

「お前が“珠取”ってやつか」

「ご明察。知ってたのは意外だ」

軽やかな笑い声をたてる。声から推測するに・・・多分男かな？自信ないけど。渚は男から視線を外さず

「どうする？」

「何をだよ」

「逃げるかって聞いてんの」

「逃げられるわけないだろ！逃げようとした瞬間、あのブーメランを投げられてはいお終い。だよ」

「じゃあどうすんだよ」

ぎゃあぎゃあ言い合っていると、男は面白そうに笑い声を上げて

「仲間割れかい？まあ二人とも逃げられても困るから、天空 桜は逃げてもいいよ。俺の狙いは真海 渚だからさ」

「渚が狙い！？・・・そうか、渚は十六を迎えているから」

「その通り。ということで真海 渚。覚悟しな」

渚は首から下げている“海の珠”を握り締める。これだけは渡さない。絶対に。

桜は立ち尽くしたまま動かない。逃げてもいいんだ。逃げてもいいんだ・・・けど。

「へえ、どういふつもりかな」

桜は渚の前に立ちはだかる。

「渚だって大切な親友なんだ。見捨てて逃げるとか論外」

そつだ。もう二度と失わないよう大切な人達は自分が護るんだ。

「桜・・・」

渚が嬉しそうに笑っている。この状況で笑えるとか・・・どんな神経してんだか。まっ気持ちはわからんでもないけど。

「友情の深さには驚きますけどね。実力が伴わないと・・・」

男は一瞬で二人の目の前に出現した。二人は目を見開く。まったく見えなかった。

「ただの絵空事だよ」

渚に刃つきブーメランが振り下ろされる。避けきれない。

桜は渚の名を呼ぶ。だが、声が出ない。

― 声を出しても届かないなら、届かせるだけの力がほしい―
渚に駆け寄る。だが、遅い。

― 走っても間に合わないなら、間に合うだけの疾さがほしい―
必死に手を伸ばす。だが、空を切るだけ。

― 手を伸ばしても護れないなら、護るための刃がほしい―
ほんの少しでいい。今、大切な人を護れるだけの 力を。

『それがお前の心か』

桜の紅い刀の形をしたネックレスから真紅の光が迸る。それに呼応するように“空の珠”が白い光を放つ。

「“空の珠”が目覚めた」

男は二人から離れる。まだ十六になっていないのに目覚めるとは・・・
・ 未恐ろしい奴だ。

桜を覆っていた真紅の光が弾ける。そこに立っていたのは確かに桜だ。ただし、左腕に紅い翼の紋章があり、真紅の腰帯に二振りの太刀を差していることを除けば。

「それがお前の心の形か」

「そうだ。私の心の形は大切な人達を護るための刃がほしい」
鞘から刀を引き抜く。

「綺麗・・・」

渚が思わずそういうのも無理ない。真紅の空に桜吹雪をそのまま閉じ込めたような美しい太刀は、桜の名前とよく合う。更に言うと、鞘まで紅桜色だ。もう一本は紅玉^{ルビ}を溶かしたような紅い太刀だ。

「よし、行くか」

「来なよ」

桜は男の前に出現した。速い。男は驚いたようにひゅーと口笛を吹き「もうそこまで力を使いこなせるとはね。恐ろしい血筋だ。天空家」
「うっせ」

金属同士がぶつかり合う音が響く。桜は今日初めて持ったとは思えないほどの太刀を扱い慣れている。実に手馴れている。渚は忙しく視線をさ迷わせる。二人のスピードについていけないのだ。

五分間斬り合っていた二人の戦いに終わりが見えた。

「どうかしたのかい？ずいぶん息が上がっているけど。そりゃそうか。体が負担に耐え切れてないんだもんね」

「くっ・・・」

男は余裕そうなのに桜は荒く速い呼吸を繰り返していた。汗も尋常じゃないほどかいている。まだ斬りあって五分しか経っていないのだ。

「桜！」

渚の心配そうな声が響く。だが、返事が出来るほど余裕がない。剣先が小刻みに震えている。視界が霞む。

（くそっ、霞むんじゃねえよ）

「どうやら立ってるだけで精一杯みたいだね。まあ無理もない話だ。珠が目覚め、腕に紋章が出た後は激痛で立ってられないらしいからね。それなのに太刀まで出しちゃって・・・動けるのが不思議だよ」
男はニヤツと不敵な笑みを浮かべる。桜は悔しげに顔を歪ませる。
息が上がるばかりで体が上手く動かない。足が霞むほどの蹴りが視界の隅に見えた。とつさに横へ飛んで避ける。が、腹に食らい桜は吹っ飛ばされた。ブーメラン男は太刀を支えに立とうとしている桜に近づいていく。

「桜から離れる！！ブーメラン男」

そんな声と共に桜の横を何かが飛んでいく。視線をずらすと、教科書のようなものだった。表紙の文字は・・・数学？

教科書はブーメラン男に見事命中。しかも顔面に。ナイスコントロール。思わずそう思ってしまった桜。すぐに我に返り

「お前、教科書は投げちゃダメだろ。いくら数学が苦手だからって」
「突っ込むところじゃないだろうが。なめてんのか。お前ら」

「この世に数学なんてなくていい。よって教科書も必要ない」

「同感」

「勝手に話し進めてんな」

男は怒鳴りながら渚に向かってブーメランを投げる。桜は限界に近い体を無理矢理動かしブーメランを跳ね返す。

「桜・・・そんな体で動いちゃ・・・」

苦しそくに息をしている桜の肩に触る。そこから伝わる異常な熱に、渚は声を荒げる。

「桜ッ・・・」

「ほっとけ。今は逃げることを・・・考えろ」

「だけど」

「いいからッ・・・」

桜は怒鳴ろうとしてげほげほ咳き込む。

「そんな体で動くな！アホ」

「誰がアホだ！足手まとい」

「なっ・・・なんだと・・・今にも倒れそうな奴に言われたかないよ！！」

「俺の存在を・・・忘れんな！」

男はブーメランを手で持ち突進してくる。体はまったく動かない。さっきの移動で体に限界が来たみたいだ。

ビキッ

何かにひびが入る音が三人の鼓膜を打つ。男は今までの余裕そうな表情から一変して、緊張した面持ちでひびの入った空間に目を向け

る。

ビキビキ

ひびは次第に広がっていき、ついに完全に砕けた。

季節はずれの雪のようにひらひらと舞い落ちていくガラスの破片のようなもの。桜はずっと感じていた奇妙な感覚が消えたことに気づいた。

「ちっ、やはりこの程度の結界じゃダメだったか」

男が舌打ちをし、近くの家屋上に飛び乗る。

「お前の方向音痴は相当なものだな、翔」

「うつせーよ。お前が信号無視して車に轢かれかけたから遅くなっただろうが」

「まあまあ、お二人とも。着いたからいいじゃないっすか」

緊張感のないやり取りと共に現れたのは、龍護、翔太、恭哉の三人だ。

「三人とも・・・なんでここに」

渚が驚きを込めた声で訊ねる。三人は渚と太刀を構えている桜を見て「桜、お前珠が目覚めたのか」

「紋章が出る・・・てことは体中に激痛が駆け巡ってるはずだぞ。何で立つてられる。お前いろいろと常識無視しすぎだろ」

恭哉の言つとおり。熱した焼きごてを体のいたるところに押し付けられている感覚が桜を襲っていた。意識が飛んでもおかしくないくらいの激痛だ。

桜は三人の登場に安堵したのか、ぐらりと前に倒れこむ。手から力が抜け、太刀が地に落ちる。渚が手を伸ばすが、間に合わない。

ドサッ

「セーフ」

龍護が地面にぶつかる前に抱きとめて、そのまま抱き上げる。軽々と。ブーメラン男は頭を掻き

「参ったな」。あんたら三人が来るとは想定外。いったん退く他ないね」

そう言い、一瞬で姿が掻き消えた。翔太と恭哉は深追いはせず、二人の自転車を起こす。

「家に帰るか。まず桜を寝かせないと」

「それが一番いいっスね」

桜をソファーに寝かせ、適当にタオルをかける。三十分まであと五分だ。それまでは気絶することはおろか痛みが麻痺することもない。天空&夕空家の犬二匹も心配そうに桜の頬を舐めている。ちなみに名前はミニチュア・ダックスフンドの方がリト、シェットランド・シープドックの方がみかんだ。

「こればかりは俺らも手出しは出来ないからな」

龍護は悔しそうに拳を握り締める。左肩には包帯が巻かれている。蹴りを食らったお腹には湿布を貼つといた。明日になったら痣になるだろう。

「もうすぐ千夏達が帰ってくる。そしたら家に集まってもらおう。

メールはしといた」

翔太が黒い携帯をパチンと閉じる。恭哉は桜の方をちらちら見ながら

「あと何分？」

「三分」

渚が時計をじーつと見つめて答える。その眼差しが真剣で怖い。桜は苦しそうに胸元を押さえている。

「三十分」

渚の声と共に全員の視線が桜に集まる。桜は目をぱちぱちさせ恐る恐る体を起こす。さっきまでは痛みで指一本も動かせなかったのに、今は痛みの欠片もない。

「どこも痛くないか？気分は？」

「平気。どこも痛くないし気分も悪くない。ちょっとだるいぐらいかな」

ほっと安堵の息をつく四人と二匹。桜は左腕を見て顔を顰める。こんな広範囲に刺青みたいなのが入った左腕を学校でさらしたら・

・特別指導になること間違いなしだ。ついてね。

「包帯でも巻いてくか」

でも待てよ。どうしたの？なぐんて聞かれたらなんて答えればいいんだ！？怪我した……。とかが妥当か？あゝもゝ私はめんどくさいこと嫌いなのに。

「桜、自覚がないだろうから言っただけ。今のセリフ、全部声に出して言っただけよ」

渚が桜の肩をぽんと叩きつつ言っていると、桜はしまったと言わんばかりの顔で口を塞ぐ。今頃遅いと思うんだが……。

「そうだ。さくら、お前の武器見せてよ」

翔太が瞳をキラキラさせながら桜に頼む。子供みたいだ。桜は困ったように微笑み、ネックレスに触り

「それが……。どうやって出せばいいかわからなくて……………」

「名前呼べばいいんだよ。例えば疾風^{はやて}、疾風^{しつぷう}」

すると、翔太の両手首にある夕空色のブレスレッドが夕空色の光を放つ。それと同時に左右の手のひらに夕空色の光が集まっていく。

光が弾けたとき両手のひらにあったのは、拳銃だった。両足には銃を入れるホルダーのようなものがついていて、制服を着ているのに妙にしつくりくるのは何故だろう。

「俺の武器は二丁拳銃なんだ。カッコいいだろ」

「カッコいい」

ちよつと触らせて、と拳銃を受け取る。本物の拳銃なんて実際に見るのも触るのも初めてだ。渚が小さく「馬鹿馬鹿しい」と鼻で笑う。

「ほら、お前も自分の武器を出して」

「うゝん……。何だっけ？名前……。名前……。名前」

呪文のように唱えながら記憶を掘り返す。太刀の名前なんか聞いたっけ？聞いた覚えはないんだけどなあ。ただでさえ記憶力ないのに。

「呆れた……」

恭哉が頭を押さえる。渚は興味津々な顔して

「天空と龍護さんの武器は？」

「そうだ。二人の武器みせて」

桜もネックレスを弄りつつ二人に近づく。龍護はちよつと嫌そうな顔をして、恭哉に「お前先にさせよ」と肘で突く。恭哉はあからさまに俺が？という顔をしつつも小さく「緋紗」と呟く。

紅いネックレスから同色の光が迸り、その光が腰に集めっていく。光が弾けたとき腰帯に紅い太刀が一振り差してあった。その姿が制服と合うから不思議だ。

「俺の武器は太刀なんだ。名前は緋紗。結構気に入ってるんだ」

「俺の武器は拳銃。黒焰だ」

いつの間に出したのか左手に拳銃を持っている龍護。足にはホルダーがついている。桜は二人を交互に見ながらネックレスを弄り続けている。どうしても名前が思い出せない。

（困ったな。なんて名前だっけ？）

うんうん悩んでいると唐突に心に浮かんできた名前があった。

「紅桜と・・・紅炎・・・」

第五章 “海の珠”の目覚め

桜のネックレスから真紅の光が迸った。その光が消えたとき、桜の腰には真紅の腰帯。その腰帯には太刀が二振り差してある。それと同時に桜の足元に桜色の瞳をもった狼と全身が炎のように燃えている瞳が真紅の鳥が現れた。

「出た！……なんで狼と……と……り？」

早速太刀を抜きつつ狼と鳥をじろじろ眺める。桜色の刀身がきらりと光る。

「それがお前の武器か……って何で刀二本？二刀流なわけ？しかも全身燃えてる紅い瞳の鳥と桜色の瞳をもった狼って……不思議な組み合わせだね」

翔太がじろじろ見ながら訊ねてくる。そう言われてもわかんないんだけど……。それに鳥と狼の方はこつちが聞きたいぐらいだし。

「へえ、紅い方も抜いてみてよ。見てみたい」

渚が桜舞に見入りながら言う。狼など視界に入っていない見たい。桜は右手で紅桜を持ったまま左手で紅炎を抜く。

「こつちも負けず劣らず綺麗」

渚が感嘆のため息を漏らす。桜は紅炎をまじまじと見つめる。燃え上がる炎をそのまま閉じ込めたかのような真紅の刀。この紅は昔、自分の大切な人達を奪った。それと同時に自分の一番好きな色だ。

「ネックレスに戻すのはどうやるの？」

唐突に思い至ったのか、渚が龍護に問いかける。龍護は何を言い出すんだと言いたげな顔で

「そんなの自分の意思でやるに決まってんじゃない」

そう言うが否や、龍護は銃をホルダーにしまう。すると銃は黒い光を放ちながら消えていった。桜は数秒ほど黙り込み、紅桜と紅炎を鞘にしまう。

「刀が……」

桜の刀は紅い光を放ちつつ消えた。いつの間にか恭哉と翔太の武器も消えている。だが、なぜか狼は消えず床に寝そべっている。隣にはリトとみかんもいる。

「なんか疲れた。てかお前は誰さ」

桜はソファーに腰掛けつつ狼に問いかける。するとまず鳥が口を開け

『あなたが我が主ですか。私の名は紅炎、不死鳥フェニックスです。以後よろしくお願いします』

丁寧な口調で挨拶する紅炎。桜はどうぞよろしく、と返す。次に狼が

『お前が我が主か。・・・ずいぶん強気な主だな。おまけに短気で無鉄砲で喧嘩っ早い性格か・・・子供だな』

ふん、と鼻で笑われた桜はにつこりと満面の笑みを浮かべ

「今なんと言いましたですか？」

「桜・・・日本語おかしいよ」

渚が冷静に突っ込むが聞いちゃいねえ。

「いや・・・そこじゃなくて不死鳥と狼が喋ったことに突っ込めよ。渚は」

恭哉が頭を掻きつつそう言うが、狼の馬鹿にしたような声音で無視スルーされた。

『言葉もまともに話せないのか。幼稚だな』

『言いすぎですよ』

紅炎が諭す声とブチッ、と何かが切れた音が聞こえたのが同時だった。

「おや、なんの音かな」

恭哉が苦笑いを浮かべつつ呟く。まあだいたいこの想像はつく。桜の元から短い堪忍袋の尾が切れたのだろう。桜は狼に向かって殴りかろうと暴れる。龍護が必死に押さえなければ本当に殴りかかっていただろう。狼は（多分）嘲笑し、毛づくろいを始める。紅炎は首を傾けどうしようか思案している様子だ。

「○#%£」

この世の言葉とは思えない言葉を滅茶苦茶速いスピードで口から吐

き出す桜。女性としてあるまじき言葉遣いだ。狼はもはや桜など眼中にない様子でくつろいでいる。それが余計カンに触る。

「はいはい、落ち着いて。日本語喋ろうか」

龍護は桜を押さえながらそう言う。恭哉と翔太は爆笑を抑えようと口を塞いでいるが、笑い声が漏れている。

『お前、“珠守”か』

「そうだ。俺と恭哉と翔太は“珠守”だ」

狼の問いに答える龍護。桜は暴れ疲れて大人しくなっている。狼はゆっくりと体を起こし、お座りの格好をとる。その横に紅炎が座る。床が燃えないか心配だ。

『俺は“空の珠”に選ばれし者の心の具現化。わかりやすく言うと桜の心が動物になったと思えばいいわけだ。武器は桜の心の形、俺らは“心力”と呼んでる。』

で、俺は桜の中で目覚めた真の力が動物になったってわけ。これを俺らは“操力”と呼んでいる。性格も本人（桜）そっくりだぞ』

『私は桜様と同じ性格ではないですけど、一応桜様の力の具現化です』

「わかつてるよ」

龍護が人当たりのよい笑顔でそう言うと、狼は感心したように唸る。

「ちなみに俺らも目覚めたぞ。俺のは九尾、翔先輩のは隼、龍先輩のは・・・犬だっけ？」

「うるさい、千夏だって目覚めてる。一角獣だったかな」

「悠紀と一夜も目覚めているぞ。確か・・・燕と虎だったかな」

三人の脳内に一夜に負けず劣らず気弱な深緑の瞳をもった虎の姿が過ぎった。主人に似すぎてる気がしないでもない。

『才能があるな。お前ら』

『さすが珠を護るものとして選ばれた方々ですね』

狼が自分の主人を横目に見つつ一人でぶつぶつ言い出す。そんな狼を紅炎が翼で叩く。桜はまだ不機嫌そうにしながらもリトとみかん

を弄る。

渚は四人を見ながら自分の力の無さを痛感していた。運動神経も無い上に武器も真の力とやらも無い。あるのは足を引っ張るといったらない才能だけ……。

（そんなの嫌だ）

ぶんぶん首を振り“海の珠”と空色の携帯についた蒼い三叉槍の形をしたキーホルダーを握り締める。視界の隅に赤いものが見えた。視線を動かすと、桜の左腕の包帯に滲んだ血の赤だった。

―大切な人達に血を流してほしくない―

『それがお前の心か』

渚の青い三叉槍の形をしたキーホルダーから蒼い光が迸る。それに呼応するように“海の珠”が白い光を放つ。

「“海の珠”が目覚めたっ!？」

「何も今じゃなくても」

渚を覆っていた蒼い光が弾ける。左腕に蒼い波の紋章があり、右手に海のように碧い三叉槍を持っている。足元には上から落ちてきたかのように頭で倒立している川獺が……。何があっただろう。

川獺は床に足をつけ、頭を押さえながら一言

『……痛い』

ああ、やっぱり喋るんだ。桜がなんとも言いがたい顔をする。常識にもほどがある。

それにしても何で私の時は狼と紅炎は出てこなかったんだ？まっとうでもいいや。

川獺から視線を外し、渚の武器に注目する。

「きれーい。海を具現化したみたい。やっぱり渚は青だよな。似合ってる。川獺も綺麗な蒼い瞳だね」

渚の背中をばしばし力任せに叩く。手形がつきそうだ。渚は三叉槍を桜に向け

「切れ味がどんなかわかんないんだよね・・・実験台一号になつてくれるかな？」

「ごめんごめん」

軽い口調で謝り、恭哉の後ろに隠れる。追おうとした渚は突然襲ってきた体中を駆け巡る激痛に顔を歪ませる。こんな体で桜は戦っていたのか。ありえない。よろめいた渚を無造作に、そりやもう荷物のように担ぎ上げ、翔太はニヤツと笑い

「これで二人。あとは美優だけだな」

「ああ、まあ美優達はもうすぐ帰ってくるだろうし」

ガチャ 「ただいま」 『邪魔します』

「噂をすれば・・・だな」

龍護にウインクしてみせる翔太。龍護は眉根を寄せ、一言

「人数分のお茶持つてくる。桜、夕飯の用意しろ！適当でいいから」

「わかった」

慌ただしく台所へ駆けていく桜。次いで、龍護は翔太が荷物のように担いでいる渚を指差し

「お前はそいつをソファーに寝かせてやれ」

「りょーかい」

間延びした返事をして言われたとおりにソファーに寝かせる。その横に川獺が我が物顔で寝そべる。千夏が心配そうにリビングに入ってきて

「“空の珠”が目覚めたんだって？桜は大丈夫なの？」

「千々夏」。私ならピンピンしてるから心配無用」

「そうそう。桜は殺しても死ななそうだからな」

恭哉が皿をテーブルに並べながら口を挟む。桜は野菜を切っていた包丁を恭哉に向け

「そこ動くなよ。その減らず口、二度と利けないようにしてやる」桜の物騒な言動にリビングに入ってきた一夜は真っ青になる。次いでやってきた悠紀が「やっちまえ・・・なんで狼と川獺と燃える鳥？って渚！大丈夫か」渚のそばにえらい勢いですっ飛んでいく。

美優はテーブルに座り、龍護から飲み物を受け取って紅炎と狼と一緒にくつろいでいる。

「桜ちゃん、やめな。夕飯楽しみにしてる」

千夏がそう言うと、桜は再び野菜を切り始める。

「美味しいチャーハン作るから待っててね」

「ふう、助かった」

「いつそあのまま死んでしまえばよかったのに・・・」

「何か言いましたか？悠紀君」

「いえいえ。この年で幻聴が聞こえるのはちょっとやばいんじゃないですか？恭哉君」

「そんな事ないですよ。俺は確かに聞こえたんですから」

空中で飛び散る火花が見えそうだ。二人はにっこり満面の笑顔を浮かべつつ嫌味を言い合う。一夜は龍護から飲み物を受け取り、会話が聞こえないように美優と雑談を始めた。

千夏は渚の様子を伺いながら翔太に話を聞いている。

しばらくして、桜がチャーハンと生野菜を皿に盛り、

「よし、出来た。皆、飯だぞ。食べ。その狼と川獺と紅炎も食うなら食べ」

『いただきます』

無心で食べ始める（渚を除いた）一同。

「桜が作った料理にしては美味いな。あれから勉強したのか」

あれから、というのは桜達が中学1年のときの事だ。あの時の桜の料理は非常に個性的な味だった。率直にいうと不味かった。

だが今は千夏と龍護、翔太、美優のおかげで料理の腕が上達した。

「まあね」

生野菜を自分の皿に盛りつつ嬉しそうに笑う。龍護は桜の頭をぐりぐり撫で回し

「よかったな。褒められたぞ」

「ちよっ・・・やめてよ、龍兄」

子供のように頬を膨らませ、龍護の手を振り払う。子供扱いされる

のは嫌いなのだ。そのまま無言で食べ進めていく桜を横目に見ながら龍護はニヤニヤ笑っている。

「ごちそうさま」

一番に食べ終わったのは桜だった。千夏と翔太と龍護と恭哉以外の全員が目を見開いた。早っ。

「速いな、食べ終わるの」

「んゝ、まあね」

ニコツと笑いながら皿を片付ける。

「そうだ。皆に聞きたいんだけど、明日空いてる？」

千夏が突然そう言い出し、一同は顔を見合わせる。

「私は空いてるよ」

桜が皿を洗いながら言うのと、続けて龍護と翔太、恭哉が「俺らも空いてる」と答える。

「俺らも空いてるよ。なあ、一夜」

「うん。バスケは日曜日だから」

「私も部活自由参加だから空いてるよ」

美優がお茶を飲みつつそう言い、千夏は嬉しそうに笑い

「じゃあプール行かない？」

『行く行く』

全員声を揃えてわいわいはしゃぐ。桜は渚の顔をべしべし叩き

「おい、聞いたか？明日プールに行くんだってよ。楽しみだな」

渚は目を何度も瞬かせて焦点を合わせる。そして薄い笑みを浮かべて頷く。川獺は迷惑そうに目を眇める。桜はなおもべしべし叩きながら

「元気ねえな。顔色も悪いし・・・大丈夫か？」

「お前だってさっきはそうだったんだよ」

恭哉が桜の頭に拳骨を落とす。桜は恭哉の腹にパンチを決め、怒鳴る。

「何しやがんだ！痛いじゃないか。暴力反対」

「やかましい。自分と同じ境遇の奴の顔をべしべし叩きやがって・

・まったく」

「うるさい。誰を叩こうが殴ろうが叩きのめそうが私の勝手でしょ」
「なんだそりゃ」

言い合いを始めた二人を周りは呆れた表情で見つめる。毎度毎度よく厭きないな、と思いつながら。

第六章 操力と心力

「さて、この馬鹿共はほつといて風呂でも入れるか。千夏、頼むわ」
龍護がのんびりくつろぎつつ千夏に頼む。千夏は「自分でやりなよ」と文句を言いつつも風呂場へ。

『そろそろ三十分経ったところか。おい、大丈夫か？ ひ弱な主だな』

「うるさいな、ひ弱で悪かったね。名前は？」

『あおは
蒼波だ』

「渚・・・起きて大丈夫か？」

翔太と龍護が視線を向けると、激痛が治まったのか渚が体を起こしていた。その顔には戸惑いの色が露になっていた。あれだけの激痛が嘘みたいになかった。余韻すらない。残ったのはだるさぐらいか。

「心配してくれてありがとう、悠紀。もう大丈夫」

悠紀に微笑みかけると、悠紀はニコツと柔らかな笑顔を浮かべる。

「今日俺らん家泊まるやついるか？」

「私は家に帰る。悠紀は？」

「俺も帰ろっかな」

「じゃあ一緒に帰ろ」

「いいよ」

「ぼっ僕も・・・」

「私も家に帰るかな」

「俺、泊まりまゝす」

恭哉が元気よく手をあげる。天空家と夕空家の兄妹はまたかよ、と言わんばかりの表情で恭哉を見る。恭哉はニコツと邪気のない笑顔を浮かべて

「いいじゃん。俺ん家遠いんだよ」

「一昨日も泊まっただろ」

桜があきれた様に呟く。恭哉は桜の肩を叩き「いいじゃんか」つれね」「つれなくて結構。気安くさわんな」

「はい、喧嘩しない」

いつの間にか戻ってきていた千夏が二人の間に立つ。桜と恭哉は睨みあいながらも大人しくなる。

「渚ちゃん、明日藤咲さんも来るって。天海海浜公園行こうって言い出したの藤咲さんだけだね」

「琉璃が・・・」

渚は嬉しそうに満面の笑顔だ。反対に渚を除いた一同はいっせいに顔を引き攣らせる。特に男性陣は心なしか顔色が悪い気が・・・。

「明日で人生が終わるかも・・・遺書書いそこ」

恭哉が鞆から筆記用具を取り出し文を書き始めた。悠紀は「顔、洗ってきます」と力なく言い置いてよろめきつつ洗面所へ。一夜はその付き添い。龍護は「俺、明日パスしよっかな」等と翔太に囁いている。翔太は翔太で「じゃあ俺は明日仮病を使って家に引き籠もる」等と言っている。

『琉璃とやらは男には嫌われているのか？』

「そうじゃないよ。皆苦手なだけ」

小声で聞いてくる狼に同じく小声で返す桜。

何故男性陣がこんなにも嫌がるのかは明日のお楽しみって事で。

「あゝあ。やつぱこうなるか」

千夏は困ったように腰に手を当てる。桜は深呼吸を繰り返し、ようやくいつも通りの顔に戻して

「当たり前だよ。私も琉璃のあの自分大好き性格は理解できない。あと美学研究部っていうもはや部として機能しなさそうな部活を作っちゃう無茶苦茶なところ」

まっ、嫌いじゃないんだけどね」と付け加える。ちなみに今の言葉に嘘はない。ただ生まれ持った性格が合わないのだ。美優はお茶を一口飲んで

「私もちよつと苦手かな・・・渚さんには悪いけど」

「確かに琉璃は自己愛が半端ないけど、友達の事に親身になってくれるし純粹で意思が強いし・・・なにより可愛いし」

確かに可愛い。それは認めてやってもいいかもしれない。しかし友達の上に親身になってくれるって？弄られたことしかないんすけど。あと琉璃のどこが純粹だよ。意思が強いのはわかるが。

心の中で猛反対する桜。だが口には出さない。口に出した瞬間、確実に殺られる。

「藤咲さんの事を熱く語っている渚さんは輝いてるねえ」

どうでもよさげな口調でのん気にくつろいでいる美優。渚の熱弁などまったく聞いてない。いや、右から左へ流れていってるのかも。

「順番に風呂に入れ。帰る奴は帰れ」

「龍護さん冷て」

恭哉がソファーに寝そべり、おやつを頬張りつつ声を上げる。龍護は無言で恭哉に近づき

ゴン 「帰れ」

「痛つてえ」

頭を両手で押さえて床にしゃがみ込む恭哉。あれは結構痛そうだ。

「じゃお邪魔しました」

顔にざまあ〜とでかでかと書いてある悠紀が鞆を持ち玄関に向かう。次いで渚、一夜、美優と続く。

「明日十時にここ（天空＆夕空家）に集合だからね。遅れた人は荷物持ち」

桜が大声でそう言うと、即座に抗議の声が返ってきた。その声に「聞こえない聞こえない」と呪文のように言い放つ。

「じゃあ明日ね」

四人は各々の家へ帰っていった。

「俺先に入るから」

翔太がう〜んと伸びをして風呂場に向かう。

「どうだった？真海 渚と天空 桜は」

ここは廃ビルの五階。今では人が気味悪がって近づかなくなった場所だ。その場所に蝋燭の明かりが揺れる。

「天空 桜の持つ“空の珠”が目覚めました」

「“空の珠”が？“海の珠”ではなく？」

驚きの含まれた声が先ほどの声とは別の方からする。

「ええ、まだ目覚めるはずがない“空の珠”が目覚めました」

一番最初の声の主の横にいる男が続きを促す。その男の横には翼の生えた馬が立っている。夜闇に溶け込む漆黒の毛並みだ。報告をしている男は更に続ける。

「武器は太刀が二振り。それも珠が目覚めたばかりなのにこちらの攻撃についてきました。剣技も力が目覚めたばかりとは思えぬほどの腕前。油断禁物です」

『私も同意見だ』

男の肩に乗っている鼯が声を発する。

「そうか。偵察ご苦労」

暗い声はそう労い、己の漆を塗ったような闇色のネックレスに触る。大きな鎌のような形をしているネックレスだ。

「我ら“珠取”が本格的に動き出す時が来たようだ。会うときを楽しみにしてるよ、天空 桜」

翌日。

「本日晴天。いいプール日和だね。楽しみ」

『朝からうるさいな、お前』

「うつせ。だいたい何でお前はネックレスに戻らないんだよ。つか名前は何？あれ？紅炎は？」

桜が当たり前のような顔で一緒にベットで寝た狼を見下ろす。狼はうつと伸びをして

『言っただろ。俺はお前の操力。お前の武器とは違ってお前本来の力なんだ。名前は紅桜だ。』

それから紅炎はまだ寝ている。朝は苦手らしい』

「だからってネックレスに戻ってればいいじゃん。必要なときに出てくれれば。刀と同じ名前なんだ」

『それじゃ間に合わないときもある。それに、姿が見えてればわざわざ呼び出す必要もないしな。そうだ、その方が覚えやすいだろう。単細胞のお前には』

「だいたい、ソウリヨクって何なんだよ。わけわかんね。しかも何で狼。というか誰が単細胞だ。口悪狼」

『教えてやろう。何故狼なのかだがお前の心の形が狼だからだ。それから武器はそれぞれの心の形。そして操力は人間の生来からもっている力なんだ。俺は口悪じゃない』

訳がわからないといった顔をしている桜に狼は呆れたように嘆息し、話を続ける。

『つまり、俺らはお前から人間が生まれたときからもっている何かを操る力なんだ。誰もが何かしらを操れる力を持っている。お前の場合は炎と再生だな。言っておくが、他の誰かと被る場合もあるからな。使い方は違うが。』

大半の人間はこの力に気づかず生涯を終える。稀に自分の中の力に気づく奴もいるが、扱い方がわからず、または呼び出し方がわからずに一生を終える』

桜は目を瞬かせる。よくわからないが呼び出せないものが大半ということだけはわかった。それと自分は再生の力を持っているという事も・・・再生？って

「つちよつと待った！」

話を続けようとした狼を遮る。桜は自分の手のひらを見つめて

「私、二つも力持ってたの？」

『ああ。何だ、気づいていなかったのか』

意外そうに目を瞬く狼。桜はちよつと顔を背け

「気づいてませんでした」

『お前は何かを甦らせる事が出来る力を持っているんだ。だが、この力にはリスクが伴う。甦らせるものによってな。例えば人の命なら誰かの命と引き換えにしないでならない。単純に物を甦らせるのなら簡単だがな。人に関わるものを甦らせようとすると、それ相

応の代償が伴う。記憶なら記憶、命なら命、心なら心という風にな
だが、これだけは覚えておけ。この力はお前の体力・精神力共々ほ
とんど使い切る。再生の力を使った後は、戦闘は不可能だ。わかっ
たな』

「再生……」

ごくりとつばを飲み込む。自分にそんなとんでもない力があるなん
て……信じらんない。

『話を戻しても良いかな。とにかくこの力に気づき、扱える者の条
件は？自分の心の形を知ること。』

お前の場合は大切な人達を護る為の刃がほしいっていう感じかな。
十六歳になってないのに珠が目覚めたのは異例だったが、あの状況
で目覚めるのは納得がいく。あの時珠が目覚めなければ操力も目覚
めなかった』

「なんで？」

『操力と珠は持ち主の感情が高まったときや、命の危機が迫ったと
き最も目覚めやすいんだ。それにあの時目覚めてなかったら渚は今
頃あの世逝きだ』

確かにそうなってたかもしれない。あいつ普通の人間が目で追える
限界速度をややすくと飛び越えやがったし。

「龍兄達は何で私より早く目覚めたの？」

『それはあいつ等がお前より早く条件を満たしたからだよ』

ふーんと納得したようなしてないような顔で考え込む桜。というこ
とは何か、龍兄達の方が先に自分の心の形を知ったって事か。それ
はそれでなんとなく嫌だな。負けた感じがする。

『話を戻すぞ』

狼が桜の視線を自分に向けさせてから話を続ける。

『条件？は心に深い傷、もしくは喪失感、穴等がある者。これは推
測だが、心の傷、または穴を埋めようとして操力が目覚めるんじや
ないかと俺らは考えている。過去に大切な者を亡くしたってのが一
番わかりやすい例かな』

桜はびくつと体を強張らせる。脳裏に赤い炎が見えた気がした。それとも一つ、いつも自分の手を引き、守ってくれていたあの人の優しい笑顔。

ぎゅつと瞳を閉じる。狼は気遣わしげな瞳をして小さく続ける。

『その二つの条件を満たしたものは真の力が目覚める』

第七章 自称美少女登場

しばらくして気分が落ち着いてから大きく伸びをして、ベットから起き上がり、着替える。今日は(ていうかいつもだけど)動きやすい格好で固める。上は黒いノースリーブ。下はジーパンの半ズボン。そして仕上げとばかりに上に灰色の半そでの上着を羽織完成。カーテンを開け、窓を全開にする。心地好い風が頬を撫でていく。桜は窓枠に登り、小さな声で

「美く優くちゃん。起きてる？」

ガラッ

窓が開く音と共にベージュ色のワンピースを着た美優が顔を出した。桜は美優の窓枠へ手を伸ばし、美優の部屋へ侵入。余談だが、菊地家は天空&夕空家の隣にあるのだ。そして桜の部屋と美優の部屋が偶然隣で、しかもちよつと足を伸ばせば余裕で行き来出来るようになっていたのだ。

「おはよう、朝から元気だね。桜ちゃん」

「おはよ、美優ちゃん。眠そうだね。また夜更かししたの？」

「してないよ。十二時半にはベッドに入ったから」

ならいいけど。軽い運動をしていると、桜の部屋のドアが叩かれる音が聞こえた。

「ヤッバ。朝食食べないと。また後でね、美優ちゃん」

慌ただしく自分の部屋へ戻り、ドアを開けると不機嫌そうな龍護の姿が・・・(とついでに毛が黒く、目も黒いジャーマン・シェパード・ドッグが・・・全身真っ黒だ、カッコいい)。嫌な予感。

「りゆうに「桜・・・俺、今日行かなきゃダメか?」「はっ?」

怒られると思つてたのにいきなりなに言い出すんだ?こいつは。桜が思わず問い返すと、龍護は俯いて

「昨日、藤咲に会うと思つただけで一睡も出来なかった」

そりゃ可哀想に。まあ仕方ないか。龍兄は琉璃に会うたびに求愛+

地獄のケバケバ地獄×琉璃特製男メロメロ香水（自作）を味わつて
るんだから。犬が哀れむように鳴く。あれ？喋らないんだ。

「龍兄頑張つてよ。今日は龍兄の大好きな肉じゃが作ってあげるか
ら」

「・・・努力する」

『お前肉じゃが好きなんだ。初めて知った』

「うっせ。俺が何好きだろうと黒くろには関係ないだろ」注：本命は黒こく
炎えん。

ああ、やっぱり喋るんじゃないか。

蛇行しながら階段を下りていく龍護。桜は龍護を落ちないように支
える。下に下りたらあと二名もこんな風になってんのかな、と半ば
厭きれながら。

黒は大きく口を開けて欠伸をしている。可愛いけど手伝えよ。お前
の主人だろうが。

下につき、リビングへのドアを開けると

『おっ？千夏、桜が来たぞ。龍護も一緒だ』

千夏の顔に甘えるように頬を摺り寄せている白い目を持った一角獣
がそう報告した。お前も喋るのか。てか何で一角獣？

「俺は持病のプールに行つてはいけない病が・・・」

「そんな病気はないよ、お兄ちゃん。ほら、さつさと朝食食べちゃ
つて。片付かないでしょ。疾風と疾風も喧嘩してないで」

「俺は持病の家から出てはいけない病が」

「そんな病気ありません。それにここは恭哉君の家じゃないから。
馬鹿言つてないでさつさと食べて。こら、緋紗。恭哉君のご飯食べ
ない」

『え〜』

予想的中。・・・いや、予想より悪いかも。男二人は生気の抜けた
顔をしつつ朝食を突いている。あと隼が二羽と九尾がいる。ん？九
尾？

「まったく・・・おはよ、桜」

「おはよう・・・で、どうしたのさ。その生気の欠片もない男二名は。それと何で一角獣と隼と九尾？それに一角獣と九尾って伝説上の生き物じゃ・・・不死鳥もだけどさ」

「一角獣は私の真の力のだよ。名前は雪^{せう}。雪のように白くて綺麗でしょ？男の方は・・・想像に任せる」

「わかった」

スカートに半そでといった軽装の千夏は深いため息をつく。大方の事情はわかってる。二人も龍兄と同じように琉璃に会うと思っただけで眠れなかった、だろうな。絶対。

「龍兄、朝ごはん食べようよ」

ゆさゆさ揺すると、龍護はよろよろと歩き・・・テーブルに着く前に崩れ落ちた。

「こりゃダメだ」

額を押さえる桜。

琉璃に会う日は必ずこうなるのだ。世話のかかる兄貴だよ、まった

く。
「桜、朝食食べなよ。片付かない」

「そだね」

その後、龍護達の口に朝食を押し込み、十時になったので外へ出る。当然のような顔で紅桜が足元へ、紅炎が肩へ舞い降りた。

「そうだ。紅炎って呼びにくいから紅って呼んでいい？」

『お任せします。桜様の好きなように呼んでください』

家の前にはもうすでに美優以外の全員が揃っていた。

「あれ？美優ちゃんは？」

「さっき三毛と遊んでたよ？そのうち戻ってくるって」

薄い青の半袖に七分丈のジーパン、肩には川獺といった格好の渚が興味なさげに答える。三毛とは菊地家の三毛猫の事だ。ちなみに、

菊地家は柴犬も飼っている。名前は柴。名前でわかるように柴犬だ。
「遅くなってごめんね、三毛と遊んでたら時間忘れちゃって」

三毛を抱かかえ、息を弾ませながら美優が走ってきた。黒いデニム

のズボンに英語が入っている白い半袖、上着が薄赤のチェック、足元には九尾といった格好の恭哉が小さく

「何してんだよ、ったくうおあ」

語尾は彼の本意ではない。では何故かという、壁にめり込んでいる誰かの拳と関係ありそうだ。

『自業自得だな』

「あらら。桜が怒っちゃった」

軽い口調で言いながら安全圏へと避難する九尾と渚。他の人も心得たものでゆつくり、だが確実に桜と恭哉から離れていく。

「お前ら、俺を見捨てんな」

「ごめ〜ん、なに言ってるかさっぱりわかんないや」

悠紀が意地悪げな笑みを浮かべて耳を塞ぐ。

「悠紀、それと緋紗。お前ら覚えてろよ」

『記憶力ないんだ。覚えてらんない』

「同じく覚えてらんない。むしろ覚えてない」

桜はいつそ清々しいほどの綺麗な笑みを浮かべ、恭哉の胸倉を掴み

「天国^{あっち}逝けや」

「おっ落ち着け桜・・・話し合えばわかっぎゃ〜」

澄み切った快晴の空に絶叫が響き渡った。

電車に乗ること一時間。琉璃との集合場所、天海駅に着いた。ここから天海海浜公園まで約一時間つてとこか。

電車に動物連れでどうやって乗ったかつて？私も最初疑問に思ったよ。それで紅桜と紅に聞いたたら

『俺らは真の力が目覚めた奴か、お前が心を許した奴にしか見えな
いんだよ』

『それか私達が姿を見せようとしないう限り見えません。ご安心ください、桜様』

「その桜様ってやめて？敬語とか上下関係とか大っ嫌いだから。桜って呼んでよ。パートナーでしょ」

紅炎の頭をばんばん撫でると、紅炎は身を縮めて

『そんな恐れ多い・・・でも主の桜さ・・・さっ・・・桜が言うなら』

「よろしい」

てな訳です。

「おつはよゝ皆」

大勢の男を従えつつ黄色地に黒で英語が書かれているノースリーブ、シヨッキングピンクのショートパンツ。栗色の髪にはピンクのリボンの飾りがついたシュシュ、耳には紫色の小刀の形をしたピアス、瞳は紫色の女の子がこちらに向かって走ってきた。

「おはよう、琉璃」

「・・・おはよう・・・？（渚以外の全員）」

朝からテンション高い声の主は多分藤咲 琉璃。格好が派手すぎて琉璃とわかるのに時間がかかった。渚の親友にして私の友でもある。そして琉璃は・・・

「おはよ、琉璃の龍と翔と恭と悠紀といっちゃん」

大の男好きだ。それからいっちゃんというのは一夜の事だ。可哀想な事に変なあだ名で呼ばれている。男子一同と動物達は顔を琉璃から背けつつ挨拶する。心なしか表情が引き攣ってる気が・・・

「琉璃とデートする為に来てくれたんだよね。嬉しい」

龍護に飛びつく琉璃。龍護はげつと奇妙な声を出し決死の表情で横へ逃れる。黒炎も必死に逃げる。琉璃はぷーと頬を膨らませて「もう、龍ったら照れちゃって。いくら琉璃が可愛いからって照れなくてもいいんだよ」

「照れてねえ。そうやって曲解すんのやめろ」

龍護は冷や汗を拭いながら文句を言う。他の男子はいつでも逃げられるように身構えている。

「とにかく、早くプール行こうよ。暑いし疲れた」

渚が琉璃と楽しげに話しながら歩を進める。他の人達は五歩後をついて行く。その後をぞろぞろと琉璃の虜になつた男共がついてくる。

正直ウザイし暑苦しいことこの上ない。はつきり言って誰だよ、お前ら。心の中で毒づく。言ってもいいんだが喧嘩になったらちよつと困る。部活面で。

イライラしながら地面に転がっている石を蹴り飛ばす。その石が『偶然』琉璃に当たった。

「ゴメンゴメン。ワザトジヤナイカラ（棒）」

『棒読みだな』

紅桜が笑い声を上げる。恭哉も恭哉の足元にいる緋紗も嘲笑^{わら}っている。「桜・・・酷い」

わざとらしく目じりに涙を溜める琉璃。いかにも演技っぽい。てか更にイライラが増してきた気がする。

『おい！その女』

「あ？」

第八章 プールだ！

半ば喧嘩腰で声のした後方を見ると、琉璃の虜になっている男共がいた。もしかしくなくても先ほどの声はこいつらだろうか。殴りてえ。
「俺らの琉璃様になにしゃがんだ！この野蛮女」
びく

桜の肩が微かに反応する。顔にはぞっとするほど冷たい笑みが張り付いている。琉璃の虜になった者以外のお馴染みの一同は、心得たものでゆっくり後ずさり、紅は美優の肩へ避難。渚と美優は両手を合わせている。

「琉璃の為に頑張って」

琉璃が投げキッスをしながら声援を送る。男共は全員目をハートにして『はい。頑張ります』

「あほらし」

桜は小さく吐き捨てて、鞆を恭哉に投げて指を鳴らす。部活の事などすっかり頭から抜け落ちている。元来喧嘩っ早い性格だし、喧嘩については忍耐も我慢も生まれつきない。売られた喧嘩は残らず買う。

「十秒で終わらせてやるよ。あの世で天使と戯れてな」

「ひい」

情けない悲鳴が上がった。安全圏に避難した龍護達の方から。

「一夜・・・いい加減慣れなよ。こんなのいつものことじゃん」

翔太が呆れ混じりにそう言つと、恭哉が「無理無理。こいつ気弱すぎだから」『そうだね』『酷いよ・・・恭哉君と緋紗』

一夜がぐくりと肩を落とす。一夜の足元にいる深緑の瞳の虎が身を摺り寄せ、美優が慰めるように抹茶のお菓子を差し出し

「聞き流しな、一夜君。恭哉君（あんな奴）の言うことをいちいち間に受けてたら身がもたないよ」

「そうそう。気にすんな」

悠紀も一夜の頭をぼんぼん撫でつつそう言う。一夜は小さく頷いて「ありがと、二人とも」

「ふう、すつきりした。眠気覚ましにはなったかな」

桜が清々しい笑顔を浮かべつつ戻ってきた。彼女の後方には痣だらけの男が山になっていた。悲惨な光景だ。琉璃はその男の山に向かつて「琉璃、弱い男は嫌いなんだ。ゴメンね」などと抜かしている。酷いな。

「桜の眠気覚ましにさせられちゃって・・・可哀想に」

渚がまったく同情してない口調で言っている横で、美優が墓標を立てていた。恭哉がなになにと文章を読む。

「この者達は喧嘩を売る相手と仕える相手を間違え天に召された。ふーん、なかなかいい文章じゃん」

「恭哉君に褒められても全然嬉しくない」

「相変わらず俺に対しての態度冷たくね？俺泣いちゃう」

「勝手に泣いてる。アホ」

桜がすれ違いざまにボソツと呟く。それを目ざとく聞きつけた恭哉は額に青筋を浮かべつつ

「何か言いましたか？桜さん。もう一度言ってください」

「何も言ってませんよ。空耳じゃないんですか？恭哉君」

最初は普段どおりの口調で話していた二人だが、会話がだんだん刺々しくなっていく。

「もっかい言ってみろつつてんだよ！何度も言わせんなー！！」

「うるさいな、耳元で喚かないで。鼓膜が破れる」

「あの二人って意外と仲いいよね」

唐突に渚が切り出した。千夏が考え込むように首を傾けて

「確かに・・・喧嘩ばっかしてるくせにね」

「言えてる」

翔太も大きく頷く。美優と一夜は会話に入らず、抹茶のお菓子について語り合っている。悠紀は恭哉と桜を見ながら何かを考え込んでいる。

「あの二人付き合っちゃえばいいのに」

琉璃が会話に割り込んできた。つい先ほどまで龍護に「デートしよ」
「琉璃の彼氏になって」など言いまくっていたのに。ちなみに言い寄られていた龍護は魂が抜けたかのようにボーっとしている。黒が龍護の足を鼻で突いたりズボンを引っ張ったりしているが、反応なし。

「突然会話に割り込んできて第一声がそれかよ」

翔太がやれやれと肩をすくめる。それから悠紀と渚は付き合ってます。わからないだろうけど……。中三の時恭哉と桜の策略により二人同時に告白したそう。

大まかに話すと、桜が渚に恭哉が悠紀に「告白まであと〇〇日」「告白まであと〇日」「告白まであと二十四時間」「告白まであと一時間三十分」と三十分単位でメールを送り、『夜の零時に二人告白すると両想いになれる』といかにもどっかにありそうなフレーズ通りになったという訳だ。

「翔の意地悪」

「意地悪で結構。それから翔って呼ぶな。せめて翔太と呼べ。で？何であの二人が付き合うとかそんなすっ飛んだ話になる訳？言っとくけど桜は物凄い鈍感だからね。自分の気持ちにも相手の気持ちにも気づかないよ」

「恭は桜の事好きなんだよ。絶対」

なに言い出すんだ、こいつは。と言わんばかりの視線が琉璃に殺到する。琉璃は「ホントだもん」と言い張る。

「わかったわかった。そこまで言うなら理由を言つてよ」

千夏がわくわくした表情で訊ねる。琉璃は自慢げに胸を張って

「女の勘」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あるものは遠い目をし、あるものは「聞いた私が馬鹿だった」と愚痴る。あるものは頭を押さえ、あるものは抹茶のお菓子を頬張っている。

「・・・プールが見えてきたな」

たつぷり五分置いてからようやく口を開いた翔太。翔太の言うとおり目の前には大きなウォーターライダーが見えてきた。

「じゃあプールサイドで会おう。場所取りはしとくから」

男性陣と別れ、桜達は女性更衣室へ。三連休初日ということもあり結構混んでいた。

「桜はどんな水着なの？」

「はっ？」

上着を脱ごうとしていた手を止め、琉璃をまじまじと見返す。そんな事を聞いてどうするのだろう。今から着るのに・・・。

「いいから教えてよ」

「上が黒地に紅い紅葉、下がこげ茶のズボンだけど・・・」

「ビキニじゃないの？」

「そんなもの誰が着るか」

あんな露出度が高いもの死んでも着たくない。それに琉璃みたいにスタイルがいい人が着るならまだしも、自分のような不細工な奴が着たら皆の目が腐っちゃう。

せつせと着替えながらそんな事を考えていると、琉璃が

「桜、琉璃には及ばないけどスタイルいいんだからビキニにしろよ。どうせその水着ビキニの上にズボン穿いたりするんでしょ？」

「そうだけど、スタイルよくないから。最近一キロ太ったし」

「それなら私はどうなるのさ」

渚が暗い顔で会話に入ってきた。

「渚痩せてんじゃん。もっと食った方がいいよ。骨と皮になっちゃうよ」

「それは言ってる」

千夏が上は白地に薄い桃の花、下が黒いスカートといった格好で桜に同意する。

「私的には千夏ちゃんと桜がもっと食べたほうがいいと思いますよ」

「これ以上食ったら太っちゃうつて」

「私も」

「桜ちゃんと千夏ちゃんが太ってるんなら私はメタボだね」

美優が深緑のワンピース水着に茶色いズボンといった格好で桜の後ろから会話に入ってきた。

「何でさ。美優ちゃんはメタボじゃないよ」

着替え終わり、と荷物を背負いながら呟く。

「皆見て、琉璃超可愛くな～い？」

上が青地に白い雪のワンピースで下が黒いズボンといった格好の渚が琉璃の方を見て一言

「琉璃、似合ってるよ」

白地に紫色の蝶が舞っているビキニを着て腰に手を当てている琉璃。桜は何も見なかったかのように視線を流し

「さて、行くか」

「そうだね」

「うん」

三人は琉璃の格好について一言も感想を述べず、歩いていく。後ろから「三人とも・・・酷い」とか言っている声が聞こえた気がするが振り返らない。

「遅ーよ、お前ら」

男性陣が場所取りしている所に着いた途端、文句を言われた。恭哉に。

「悪かったね」

荷物をそこらに放り投げて椅子に座る。恭哉が首を傾け

「泳がないのか？」

「あの馬鹿をどうにかして」

桜の指差す先には早速男をオトしまくっている琉璃の姿が・・・。

男性陣は一分間沈黙し

「ほっとこう」

龍護のこの一言に渚以外の全員は即座に従った。

「最初の荷物番誰にする？」

翔太がちらちらとプールに視線を飛ばしながら皆に問いかける。悠紀が

「じゃんけんでいいんじゃないですか？男女一人二組を作って」

「そうするか。桜は俺とな」

龍護がニコツと微笑み、桜は若干嫌そうにしながらも頷く。一夜と美優、悠紀と渚、翔太と千夏とペアが決まった・・・が。

「俺余りかよ」

恭哉がズーンと落ち込んでいる。渚は人の悪い笑みを浮かべて恭哉の肩を叩き

「琉璃がいるじゃ「却下」

渚の言葉の途中で全力で拒否する恭哉。首がちぎれそうな勢いで首を振っている。そんなに嫌か。

「じゃあ龍兄とペアーになれば？三人でもいいでしょ？龍兄」

「まっいいけど」

桜がそう提案すると、恭哉が闇にさした一筋の光を見るような顔で

「ありがとう、桜。今度なんか奢る」

「ティラミス食べたい」

「わかった。奢る」

第九章 意外な敵

てな訳で、最初は一夜と美優ペアが荷物番。そこから一時間交代で回していくらしい。ちなみに桜達は三番目。

「よし、まずは波のプール行こうよ」

「行こう行こう」

子供のようにはしゃぎつつ早歩きで歩いていく恭哉と桜。その後を追いつながら悠紀と渚は楽しげに話している。いいねえ、ラブラブで「いつあいつ等が襲ってくるかわからないのにこんなことしていいのか？龍」

「逆だ。こんなときだからこそだよ。」

それに、渚の話だと桜は“珠取”のスピードにもついていけてたみたいだし、渚もそんぐらいならできんだろ。いざ戦いが起きても誰かが力を使ったら俺ら全員に伝わるはず。俺らが“操力”または“心力”を使ったら、同種の力を持ったもの全員に余波が届くからな問題ないだろ」

「それもそうか」

その後、流れるプールに行ったりウォータースライダーに行ったり二十五メートルプールに行ったり滑り台に行ったりと実に忙しく動き回った。おかげで昼になり荷物置き場に戻った頃には渚と美優と千夏が

「も・・・一步も・・・動けな・・・ガク」

「死ぬな！渚」

という展開に・・・。疲労死するなんていったい何があったんでしようね。男性陣+桜はびんぴんしてるのに。

「昼飯買ってくるわ。焼きそばでいいしょ？」

恭哉が財布をぽんぽん投げつつ一同に聞くと「好きにして」「・・・羽の生えた赤ちゃんだ」「いいんじゃない」「・・・お花畑が見える」「いいと思う。一人じゃ大変だろうし僕も一緒に行くよ」「

いつてらゝ」「綺麗な川が見える」「渚！しつかりしろ」

「結局返事したの四人だけじゃん。聞いて損した。しかも三名天に旅立ってるし」

「縁起でもないこと言っな！」

悠紀が顔を真つ青にしながら怒鳴る。恭哉は「悪い悪い。じゃ行ってくる。一夜、行くぞ」「まっ、待ってよ。恭哉君」

「転けんなよ」

桜がそう言った傍から一夜がよるめいている。心配だな。

「俺、トイレ行ってくる」

「俺は渚と美優と千夏の飲み物買ってくる」

悠紀と翔太が立ち上がり、悠紀は更衣室へ、翔太は自動販売機を探しに行った。龍護も

「俺もタオル濡らしてくるから。動くなよ」

「わかってるよ。行つてらっしゃい」

龍護に手を振る。暇なので下にタオルを敷いて寝転がり、空を見上げる。今日は雲が多いが、今は太陽は顔を出している。

「眩しいな・・・」

手を翳し、そのまま空を眺める。青空は好きだ。特に、吸い込まれそうなほど澄んだ青空は。

でも夕焼けの空の方がもっと好きだ。少し切なくて、すぐに消えてしまいそうなほど儚く、優しい色。まるであの人のよう。

「ってなに思ってたんだか・・・もういないのに」

はあとため息をつき手の甲を目に当てる。優しい笑顔でいつも自分の一歩先を歩いていくあの人に、むしろように会いたくなった。本来ならあの人が正統継承者だったのに・・・あの時・・・

無意識に珠を握り締める。あの時、私を追って・・・珠越しに空を見る。澄み渡った綺麗な空を見ると、何故か泣きたくなってきた。その時

「俺らと一緒に来てくれない？」

「はい？」

感傷に浸っていると、低い声が聞こえた。手の甲を退け体を起こすとそこには絵に書いたようなチャラ男が二人……。金髪が太陽の光を弾いて眩しい。

「だから、俺らと一緒に来てくれない？」

「そう言われて素直にはいつて言う人がいると思いますか？もう少し頭使ったらどうです」

桜はうぜえという顔をしつつ手を左右に振る。あっち行けのサインだ。男共は機械的に同じ言葉を繰り返す。

「俺らと一緒に来てくれない？」

「しつこい」

殴りかからないように自制する。イライラすんな。だいたい、見ず知らずの輩に声かけられるほど有名人じゃないし。

「俺らと一緒に来てくれない？」

「……？」

おかしい。桜は妙な違和感を覚え、男二人を見る。さっきは気づかなかったが目が空ろだ。体の動きもどこか不自然だ。まるで操られているかのように……。

「^{べに}紅、紅」

小さな声で二人を呼ぶ。そしてそのまま小声で続ける。

「こいつら、もしかしくなくても操られてる？」

『完璧にな』

『“珠取”の仕業ですね』

舌打ちをし、立ち上がる。男二人は変わらず同じ言葉を繰り返している。これじゃあ壊れたロボットだ。

「しつこいって言うてるだろうが！」

一方の男の腹に拳を、もう一方の男の腹には蹴りを入れる。容赦なく。ちよつと酷すぎる気が……。

『いくらなんでもそこまでしなくても……』

紅桜は同情を込めてそう言うが、桜は冷たく一言

「何度も同じ言葉を繰り返されたら誰だってイラつくでしょ。った

く、壊れた機械じゃあるまいし」

『この人達は操られていたのですから不可抗力では……』
「知るか」

酷すぎる。紅桜と紅は顔を見合わせ、がくりと肩を落とす。桜は男共の体を操っていた正体を見つけるために、男共をじろじろ眺めたり触ったり抓ったり殴ったり……。

「これか……」

桜の手のひらにあったのは、薄いピンク色の紐のようなものだった。紅桜と紅も桜の手のひらを覗き込み

『この紐は“心力”だな。お前の太刀と一緒にだ』

「じゃあ誰かの心の具現化……」

手のひらの上で紐はまるで生きてるかのように動いている。桜は紐を握り締め

「これを辿ってけばいるんだな。“珠取”が」

桜は自覚はないだろうが不敵な笑みを浮かべていた。その顔はどこか嬉しそうだ。紅がそう指摘すると、桜はニヤツと笑い

「もしもブーメラン男がいたら叩きのめしてやる。私の親友の命を狙った罪を思い知らせてやるんだ。楽しみだな」

『怖いな』

紅桜がボソツと呟く。桜は意気揚々と歩き出す。普通自分の命を狙っている奴の元に自分から行く馬鹿はいるか？いるか……俺の目の前に。

紅桜は半ば呆れ混じりに桜の後を追う。紅は桜の肩で抗議している。これは罠です。龍護さん達に知らせるべきです。待ち伏せされてたかどうかですか、等と。だが当の本人はまったく聞いてない。

『俺はこんな自分勝手な奴に従わないといけないのか』

不幸だ、と今更嘆いても遅い。ため息をついた時、桜があつと声を上げ

「美優ちゃん達置いてきちゃった。ヤバイ……紅桜、頼む」

俺かよ、と言いそうになったがその言葉をため息に変え、諦め混じ

りに

『わかった』

「ありがとう、紅桜。助かる」

これで心置きなくあのブーメラン男をぶちのめせる、と楽しげに続ける桜。紅が

『そのブーメラン男がいるとは限らないんじゃない？』

と言っているが、完璧にスルーしている。頭の中はブーメラン男をぶちのめす事で一杯なのだろう。

『桜らしいな』

そつだ。こんな奴だからこそ俺は・・・。

『無茶すんなよ』

紅桜が氣遣わしげにそう言つと、桜は紅桜の頭をわしわしかき回し微笑む。

「心配してくれてありがと、美優ちゃん達を頼む」

『任せとけ』

紅桜と別れてから五分後、人気のない場所にたどり着いた。ちょうど売店の裏に当たる所で、人は滅多に來ない場所だ。桜は紐をくいくい引つ張りつつ

「ここでもいい筈なんだが・・・誰もいないな」

辺りに人影は一切ない。困つたように頭をぼりぼり掻き、どうしたものかと腕を組む。

『誰もいないみたいだし戻りましょう。龍護さん達が心配しますよ』

「それもそつだな。つて言つてもあの馬鹿兄貴が私の心配なんかするわけないと思うけど」

そう言いつつも踵を返す。刹那、異質な空氣が辺りに満ちる。この感じは前にも・・・。

「ということとは」

小さく呟き、太刀を呼び出す。紅はいつでも動けるよう身構えている。静寂が支配する中、足音が響いた。それと同時に女の声がどこ

からか聞こえた。

「やっぱり。来ると思ったよ、桜」

聞き覚えのある声だ。中学からの同級生で、よく競い合った仲だ。中学の時、恭哉と付き合ってたらしい。高校に入ってからほとんどあつていないが、この声を忘れるわけない。独特の甲高い声。

「・・・亜衣莉」

「へえ、覚えててくれたんだ。嬉しいね」

亜衣莉と呼ばれた女の子は薄いピンクの瞳を細める。こげ茶の髪は後ろで束ねてある。中学までは黒かったのに、いつの間に染めたのやら。しかも肩にはピンク色の蜘蛛を乗っけている。

「髪型変えたのか。久しぶりに見たら髪も染めてるし」

「この色のほうが綺麗でしょ？ずっと髪染めたかったから」

「似合ってるんじゃない。どうでもいいけど」

桜は相手の言動すべてに注意しながら構えを崩さない。今気を抜いたらヤバイ。そんな感じがする。

「そっちは相変わらずだね。ちっとも変わってないじゃん」

友好的な雰囲気でゆっくり歩み寄ってくる亜衣莉。桜も少し引き攣った笑顔を作り

「悪かったね。でも髪は伸びたよ。もう少しで腰に届く」

胸を張って言うのと、笑われた。眉を吊り上げ睨みつけると、亜衣莉は肩を振るわせて

「ごつごめ・・・」

「笑いながら謝っても許さん」

桜の緊張が僅かに緩んだ。それと同時に頭上からブーメランが飛んできた。

『桜！』

紅の警告の声と、桜が体を反らすのはほぼ同じだった。頬に浅い切り傷が出来る。桜は頬の血を拭いつつ

「あつぶね、もう少しで当たってたかも」

ブーメランは持ち主の元へ戻っていく。桜がブーメランに視線を奪

われていると、死角から亜衣莉の紐が迫る。

『桜！左』

「――っ！！」

桜の眼前まで迫った紐は、紅が放った炎で燃え散った。桜はほおと息を吐き出す。

「紅、ありがとな」

『いえいえ』

前を見ると、信じられない人物が立っていた。桜は我が目を疑った。

「やつ、桜ちゃん」

「や・・・山・・・下・・・大地・・・先・・・輩」

そこにいたのは山下 大地だった。手にはブーメランを持っている。肩には朱色の瞳を持った白い鼯が乗っている。目の前の現状に頭がついていけずに突っ立っている桜に、大地はニコツと微笑みかけ

「驚いた？そう、杉浦と俺は“珠取”の一味」

朱色の瞳が鋭く光る。朱色の光と共にブーメランが消えていき、茶髪のを鬱陶しそうにかきあげ、淡々と続ける。

「桜ちゃんの、敵だよ」

ぎゅっと拳を握り締める。先輩の言葉に嘘はない。先日襲われたときも、さっきの攻撃も的確に急所を狙っていた。

嘘じゃ、ないんだ。亜衣莉も先輩も、本当に・・・「敵なんだ」

絞り出した声は掠れていた。大地は人当たりのよい笑顔を顔面にはりつけている。亜衣莉はいつも見慣れている無邪気な表情だ。だが、二人は自分の命を狙っているのだ。迷うな。

きつく目を閉じる。体が微かに震えているのがわかる。

くそ、震えてんじゃねえよ。

「桜、私達はあなたを殺しに来たわけじゃない。“空の珠”を渡して。そうすれば逃がしてあげる」

「却下。これは絶対に渡さない」

ポッケに入れといた“空の珠”を守るように刀を構える。紅も戦闘態勢に入った。亜衣莉は残念そうに眉を顰め

「あゝあ、殺さないとダメか」

明確な殺気が桜の全身を突き刺す。ぐつと息をつめ、相手の出方を伺う。状況はこっちのほうが圧倒的に不利。どうする。

「俺が桜ちゃんを殺る。お前はあの鳥を殺れ」

「私に命令すんな。変態男。行くよ、綾」

『わーい』

亜衣莉は自分の髪ゴムに触り、冷たく笑う。大地は携帯についている朱色のキーホルダーを掴む。

ピンクと朱色の光が消えたとき、亜衣莉は紐を大地はブーメランを持っていた。

桜はゆっくり息を吸う。一瞬でも気を抜けば、死ぬ。

「行くよ。構えな、桜ちゃん」

第十章 声

語尾を置き去りにしながら迫ってくる大地。桜は迷いがそのまま現れ、反応が遅れる。

キーン

金属同士がぶつかる音が響く。桜は二、三步後ろに下がる。反動でよろめいたのだ。大地はブーメランを振りまわし、勢いをつけて投げる。桜はそれを転がって避ける。が、腕に鋭い痛みが走る。視線を向けると、血が流れている。避けたのに、何故。

「俺のブーメランは風を纏うことで切れ味が上がり、攻撃範囲も広がる。ただ避けるだけじゃ俺の武器からは逃げられない」

「くっ・・・」

悔しげに声を漏らし、立ち上がる。武器に力を纏わせることが出来るのか。なら私にも出来るのか？でもどうやって。

『心ヲ研ギ澄マセ』

「えっ？」

戦闘中にも関わらず左右を見回す。だが近くに誰もいない。紅の声でもない。じゃあ何処から・・・。

『刀ニ炎ヲ灯ス事ヲイメージシロ』

「刀に炎を灯す」

深呼吸をしてイメージしてみる。刀に炎を灯す・・・刀に炎を灯す・・・

ゴォォ

目を開けると刀が燃えていた。桜は顔を輝かせる。

「出来た」

『当然ダ。お前二ハソノ力ガあるノダカラ』

「力・・・」

「何をぶつぶつ言っているのか知らないけど、戦闘中に考え事とは余裕だね」

驚いた顔をしつつもブーメランを投げってくる大地。桜はブーメランを真っ向から受け止め、弾き返した。ブーメランに火が移り、大地に向かつて返っていく。それを慌てて避ける大地の顔には驚愕の表情が張り付いていた。

「バ・・・バカな」

驚愕に目を見開く大地。桜の大地の目の前に出現し、腹に蹴りを入れる。大地は優に五メートルは吹っ飛んだ。桜は不敵に笑い

「この前私を蹴り飛ばした仕返しだ」

「ちっ」

素早く起き上がり、ブーメランを呼び戻す。

金属同士がぶつかり合う音が何度も響く。桜も大地も口元に笑みを刻んでいた。実に楽しそうだ。

「素人のくせによくやる」

「素人じゃないしっ」

斜め上から肩口を狙う。大地は手首を返し、それを受ける。桜はすかさず軌道を変え、横腹を狙う。大地は軽く目を見開いたものの、その攻撃を受けたかのように見えた。だが、中途半端な体勢で斬撃を受けたせいで、ほんの僅かに大地の体勢が崩れた。桜はその隙を逃さず、大地の足を払う。

「なっ」

今だっ。

たまらず傾いだ大地の腹部に、桜色の太刀が襲う。大地は目を見開き、無理矢理体を捻る。

ドサツと何かが倒れる音と共に、血飛沫が上がる。大地は地面に倒れ、腹部を押さえている。桜はしてやったりと言わんばかりの顔で立っている。

「やるじゃん。俺に傷を負わせた奴なんて久しぶりだ」

「そいつらが弱すぎたんじゃないデスか。ム力つくんでそんな雑魚と一緒にしないでいただけます？それでも護身術の類は片っ端から叩き込まれてるんだよ。」

最後に一言、なめんじゃねえ」

亜衣莉は視線は紅に向けたまま

「苦戦してるの？代わってあげようか？」

「うるせえ、こいつの飲み込みの速さに驚いただけだ」

大地はブーメランを勢いよく投げる。ひゅんと風を切る音が耳に届く。桜は真っ向から受け止め、相手に弾き返す。が

「いな・・・い」

大地が視界から消えていた。すると下から

「がら空きだよ」

咄嗟に太刀を盾にするが、間に合わない。視界を白いものがおおい、左腕に鋭い痛みが走る。鮮血が迸り、桜は壁に向かって吹っ飛ばされた。地に刀を刺し、勢いを殺して壁に激突はなんとか避けた。足から力が抜け、片膝をつく。左腕には大きな口のような傷口が出来ていた。反射的に左腕で体を庇ったのだ。

左右の腕からは血が溢れ、大地を赤く染めていく。反射的に左腕の傷口を押さえる。そんなことをしても無駄だとわかっているが。

「——っ」

痛みに顔を歪ませながらも立ち上がる。その間も血が流れていき、右手も赤く染まっていく。渚が見たら卒倒するかもな、と関係ないことが脳裏に浮かんた。

「よくやった、飛来^{ひらい}」

肩に乗っている魼の頭を撫でる。魼の爪は桜の血で真っ赤だった。

「桜！その出血量はまずいです。早く止血を・・・っ！」

「よそ見しちゃダメだよ。あんたの相手は私なんだから」

紅が叫んでいるのが聞こえる。視界が霞がかってきた。頭の芯がポロポロとする。多分血が足りてないのだろう。血の気は多いほうなのだが。

他人事のように左腕を眺める。真っ赤な血は相変わらず流れ続けている。

「深くやり過ぎたかな・・・」

「加減しろって言ったのに……。リーダーに怒られちゃうじゃん。馬鹿飛来」

『知るか。だがこいつの判断はよかったな。でなきゃ今頃内臓とか飛び出してたかもね』

「グロイ表現すんな。想像しちまうだろうが」

大地は本当に想像してしまっただらしく、口に手をやりそっぽ向く。

「勝手に……。っ話し進め……。な」

『“空の珠”ヲ握レ』

「え……。」

言うとおりに珠を握る。するとどこからか声が指示をする。

『目クラマシニナリソウナ天気ヲ言エ』

「目くらまし？いきなり言われても……。」

『イイカラ言エ！』

「かつかみ……。なり？」

適当に呟いた瞬間、あつという間に結界内に黒雲が出現し、白銀に輝く雷が落ちてきた。あまりの眩しさに思わず目を瞑る。

雷光が収まってから目を開けると、大地と亜衣莉は目を押さえている。どうやらもろに食らったらしい。視界が白く染まっていることだろう。

チャンスだ。

桜は残りの体力と気力をかき集め、炎を召喚する。それを刀に纏わせ、思いっきり振り切る。炎の斬撃が大地と亜衣莉目掛けて放たれた。炎刃は横に広がり、大地達に迫る。炎刃の通った跡は地面が深く抉られ、黒く焼け焦げている。

『ダメです！その力はあなたの体力と精神力を使うんですよ。珠の力を使った後にそんな無駄したら……。』

「まだそんなが残ってたんだ。さすが“空の珠”に選ばれし者」

二人は迫り来る炎刃を目が見えずとも気配で感じ取っていた。飛来が二人の前に飛び出し、真空の衝撃波を口から放つ。炎刃と衝撃波がぶつかり合い、数秒間拮抗する。だが、体力・精神力共に限界に

たっしていた桜の一撃は、二人には届かず相殺される。

相性云々ではなく、純粹に体力・精神力で劣っていたのだ。

『これで仕舞いだ！』

飛来が再び衝撃波を放つ。桜はぎりつと唇を噛みしめ、太刀を掴む。パンパン

黒い炎の塊が二つ桜の横を通り過ぎた。その炎は真空の衝撃波を燃やした。テレビでしか聞いた事のない音が鼓膜に伝わる。ぼんやりとした意識の中で、桜がゆっくり視線を巡らすと、見覚えのあり過ぎる人達が。

「こんなところで結界張ってなにしてんのかと思えば、二人で一人を突きまわして楽しんでるとは・・・趣味悪いな。それとさっきここから轟音しなかった？しかも、でっかい黒雲あるし」

「桜が珠の力使ったんじゃないん？“空の珠”を使えばあのくらい造作もないでしょ。

山下、やつぱりお前だったんだな。“珠取”の情報収集係は」

相手を射抜くような鋭い視線で睨みつける翔太。大地は人当たりのよい微笑を浮かべ

「あれ？意外だな。気づいてなかったんですか？翔太君。それよりどうやって入ってきたんです？二重結界張ったんですけど」

「同調して入った。似たような力使えんだ。そんぐらい出来るに決まってる。騒ぎは起こしたくないしな」

龍護がどうってことないとも言つような口調で説明する。悠紀が燕を指に止まらせて

「渚が待ってるんだ。さっさと終わらせようか」

「杉浦。お前も“珠取”の一味だったのか。そんな気はしてたけどさ」

「恭哉じゃん。私のより戻す気になった？」

「なるか、ボケ」

「抹茶のパフェ美味しいな」

「さっ桜、大丈夫？」

渚と千夏以外の全員がいた。先ほどの音は龍護の拳銃から出た音みたいだ。銃口から煙、出てるし。

『“珠守”と“地の珠”の正統継承者の方々』

「よく頑張ったな、桜。喧嘩の経験はあっても戦闘経験がゼロに等しいお前が死ななかつたのは上出来だ。しかも大地に傷までつけて」龍護が桜を抱き上げながらそう称賛する。美優は口を覆い、桜の左腕から目を逸らす。出血は治まりかけているが、血に慣れてない者が見るにはきつい光景だ。美優は棒の形をした翠玉色のプレスレットを握り締める。自分に傷を治す力があれば・・・。

―大切な人達の傷を癒したい―

『ようやく定まったか。お前の心が』

翠玉色の光が美優を包み、弾ける。そこには翠玉色の棒を持ち、左腕に双葉の紋章が現れた美優と、何故か頭に猫が乗っている。翠玉色の瞳に尾が二本の猫だ。可愛い。

「棒？なんで？」

「さあ？私にもわかりません」

悠紀が尋ねるが、美優も首を傾げるしか出来ない。翔太が顎に手を当て考え込む。普通救急箱とかじゃないのかな？この棒でどう傷を治せて？

『棒を傷口に当てろ』

猫がそう指示する。美優は戸惑いながら棒を桜の傷口に当てて。すると、そこから出てきた淡い緑色の光が桜の傷口を覆っていく。一分後、緑色の光が消えたとき、桜の傷口は塞がっていた。流れたはずの血の跡もない。

『まだ完璧に治癒は終わってないけど、安静にしていればあと一時間ほどで完治するよ。それから浅い傷は治さないから。美優が限界みたいだし』

「すげえ・・・」

感嘆の声を漏らす恭哉。一夜は驚きのあまり口をぽかんと開けている。美優は体を襲う激痛に顔を歪ませる。そのまま地に手をつき、倒れないように体を支える。一夜がおろおろしながら美優の体を支える。龍護は敵と睨みあいながら

「お前らも加勢しろよ」

と文句を言う。悠紀はめんどくさそうに立ち上がり、剣を呼び出す。空色の燕もいる。桜は頭を押さえつつ起き上がり

「あれ？傷がない。夢だったのか」

等と寝ぼけたことを言うので、恭哉が一発殴り

「現実だ。寝言は寝てから言え。アホ」

「んだと・・・表に出る。バカ」

「ここ一応表だし。いや、結界の中か」

翔太が冷静に突っ込むが、二人はまったく聞いていない。ぎゃあぎゃあと小学生レベルの口喧嘩を展開する二人。

「こんなところで始めるんだ。アホ喧嘩」

翔太が呆れまじりの笑みを浮かべる。美優は激痛のため会話に入れません。

「ここはいったん退きますか。この人数相手じゃきついし」

「賛せーい」

亜衣莉が紐を空に放つと、二人を包みこんでいく。紐の隙間から見えたと大地の口が動いた。

「また、学校で」

「待て！」

翔太が叫ぶが、二人の姿はもうなかった。翔太は悔しげに舌打ちをし、腹いせに結界を壊す。喧騒が戻ってきた。血の跡や抉れた地面も元通りになっている。桜達がさっきいたのは現世とは別の場所、似て非なる場所にいたのだ。

「さっさと戻るか」

龍護の声で全員は動き出した。

「遅い。いつまでもたもたしてたのさ」

渚が元氣よく叱り付ける。悠紀が何度も謝っている。他の人は無視し、焼きそばを食べている。美優は横たわり、苦しそうにしている。「そういえば滅茶苦茶腹減ってたんだっけ、私」

焼きそばを食べつつしみじみしている桜。横にお座りしている紅桜が何度も頷き

「そりやそうだろう。紅から聞いたぞ。お前体力ほとんどない時に操力使ったんだって？下手したら死ぬぞ。まあ普通は使えないはずなんだがな・・・よく操力にまわすスタミナがあつたな」

「結果オ・ライって事でいいじゃん」

まだふらふらするのか頭を押さえつつニコツと笑う桜。美優の治癒能力は傷は治すが、流れた血までは戻らないのだ。紅は心配そうに左右の腕を見る。両腕とも傷は綺麗に塞がっている。浅い切り傷は残っているが。だが、あんまり暴れると傷口が開くって言ってたよね。桜が暴れないとか想像出来ない。

「大人しくしててって言っても聞かないんだろうな」

紅は諦めまじりの声で桜を見上げる。大事な主人の無茶を止めるのが私の役目。無駄だろうけど頑張ろう。

紅の決意は露知らず、桜は焼きそばの容器をゴミ箱に捨て

「傷も治ったし、腹も膨れたし、プール行こつと」

何を言い出すんだこいつは。渚と千夏以外の心の声が一致した。龍護は苦笑するしかないなと言った様子だ。紅は猛然と抗議する。

「なに言ってるんですか！？あの猫の言葉聞いてたでしょ！？？安静にしてないと傷が開くって言ってたんですよ。このプールをO型の血で赤く染める気ですかっ！！？一般人卒倒しますよ！おまけに出血多量で死にますよ。あ・ん・せ・いにしてください！」

「紅は心配性だな。大丈夫だつて」

「いいえ、彼女は正しいわ。あなたの体は体力・気力共々限界に達している。安静にしてないと傷が開いて死ぬわよ？」

「そんな事知るか。私はプールに行きたいから行く。それだけだ」

きっぱり言い切る。自分の体の事などまったく気にしてない。いや、むしろ自分から捨てている気が・・・。

『アホですか！いくら自分が嫌いだからって無茶すぎです』

桜の顔が微かに歪んだ。すぐに俯いてしまったので付き合いの短い渚と悠紀にはわからないほどの変化だが、龍護達は見逃さなかった。理由を知っている龍護と翔太と恭哉は暗い顔で俯く。一夜と千夏はさりげなく悠紀と渚をその場所から離す。美優は顔を背ける。

「・・・私の体をどうしようが・・・私の勝手でしょ」

返答が不自然なほど遅かった。俯いているので表情はわからないが、その声には隠し切れない悲しみと自責の念がこもっていた。紅ははつとした顔で謝る。

『ごめんなさい・・・』

「・・・なに・・・謝ってんのさ。・・・別に気にしてないって」

桜は顔を上げた。そこにあるのはいつも通りの笑顔だった。もちろんいつも通りの笑顔のはずがない。作り笑いだ。紅桜は見られないという風に顔を背ける。龍護は何か言いたそうに口を開くが、結局何も言わず黙り込む。恭哉は桜の肩に手を伸ばすが、途中でその手を降ろす。

「ちよつと顔、洗ってきます」

そのままの笑顔で立ち上がり、しっかりとした足取りで歩いていく。恭哉が後を追おうとしたが、翔太に止められ立ちすくむ。

「まだ引き摺ってたのか・・・」

「当然だろ。あんなに懷いてたんだから」

「あの時あの高校生さえ来なけりや・・・」

「桜ちゃん・・・」

四人は重いため息を吐き出す。

桜（と龍護）は二度、大切な人を亡く（失く）している。

一度目は桜の本当の兄、天空 慧斗。二度目は両親とその他の天空

家の人達。

慧斗は桜の一つ年上で、龍護とは同い年だった。優しく、面倒見がよかった慧斗に、桜はいつもついていていた。兄妹仲もよく、たまに喧嘩はしてもすぐに仲直りしていた。龍護とは悪友で、三珠町ではちよつとした問題児だった。

だが、嫌われていたわけではなく町民からも天空家の人達にも好かれていた。そして、慧斗は“空の珠”の正統継承者だった。才能にも恵まれ、五歳の頃には操力も心力も扱えるようになっていた。誰もが慧斗が珠を受け継ぐと信じて疑わなかった。

あの事件が、起きるまでは・・・

「あの日の事を死ぬほど後悔しているのは俺ではなく、桜だろうな・・・」桜曰く、自分のせいで自分の兄を失くしたのだから。そしてあの日から桜は重い十字架を背負うことになったのだから」
龍護が固い声で呟く。

第十一章 慧斗（前書き）

ひらひらと雪が舞っている

触れることを躊躇ってしまうほど美しく、真っ白で、花のように舞い落ちてくる雪

子供の頃はただ綺麗だな、としか思わなかった

今になって思うと触れることを躊躇ってしまうのではなく、触れられないのではないだろうか

触れたら最後、儚く夢のように跡形もなく消えてしまう気がするから——
——まるで、最初からなにもなかったかのように——

第十一章 慧斗

「いつてきまゝす」

「待つてよ、桜。鞆忘れてる。手ぶらで行く気？」

「持つてきて」慧兄。・・・あつ、雪が降ってる。もう十二月だもんね」

「二人とも俺を置いてくなくて。行つてきます、母さん」

「行つてらっしゃい。気をつけてね」

桜、七歳。慧斗、九歳。龍護、九歳。

今日は小学校の終業式。めんどくさいが行かないとダメらしい。そんな事のために行くより寝てたいんだけど。

「慧兄見て。雪だるま」

階段に積もった雪を丸めて真紅の瞳と髪は薄い黒髪の慧斗に差し出す桜。ほんとそっくりの兄妹だ。だが似てない所もある。桜は見るからに強気そうなのに対し、慧斗は一秒で倒せそうな外見。だが、こう見えて俺より強い。認めたくないけど。

慧斗は優しく微笑んで

「上手に出来たね。さすが桜」

わしゃわしゃと頭を撫でられ桜は朝からご機嫌だ。桜はホント慧斗が好きだよな。まあ俺も良い奴とは思ってるけど。というか大親友だし。

「龍兄、雪合戦しよ」

無邪気な声で抱きついてくる桜。俺は指を鳴らし

「いいぜ。受けて立つ」

「何で指鳴らしてるわけ？別に喧嘩するわけじゃあるまいし」

慧斗が呆れたような顔でこちらを見てくる。俺は早速雪を固く丸めながら

「うつせーな。なんとなくだよ。な・ん・と・な・く」

「どうでも良いけど桜に怪我させないようにね。知ってるよ。龍、

この間桜を背負い投げしたんだって？翔が教えてくれたよ。背中に青あざ出来てたよ。もう少し手加減してあげようとか思わないの？桜、女の子なんだよ？わかってる？」

翔の奴、慧斗にチクリやがったのか。後でぶっ飛ばす。

心の中で密かにそう決め、桜に雪玉を投げつつわざとらしくそっぽを向き

「何のことかな。さっぱりわかんない。うおっと、危ね」

「余所見すんな。馬鹿龍兄」

桜は舌を出し、生意気にもそんな事をほざく。俺の中でどっかが派手にぶち切れた音がした。

「んだと・・・ッ」

「翔に聞けばすぐにわかるさ。って聞いてないか。あつ、翔、千夏、一夜、恭、美優、おはよ」

慧斗が手を振る。龍護は後ろに目を向ける。そこには待ちくたびれたといった感じの恭哉と翔太と瞳が紅く髪が茶髪 of 恭哉の兄、来哉に嬉しそうに顔を綻ばせる千夏と美優、悴んだ指先に息を吹きかけている一夜がいた。

「おはよう、翔兄、千夏、美優、一夜、来兄、おまけの恭哉」

「おはよう、桜ちゃん」「はよつす、桜」「おはよう、桜ちゃん。

朝から元気だね」「おはようございます」「おふあよ」

千夏と美優は控えめな笑顔を浮かべて小さく手を振る。別に彼女達の性格が控えめなのではなく、寒さのためだろう。動くと隙間から風が入ってくるから。男性陣は一夜を除く全員が気だるげに大あくびをする。

「誰がおまけだ。チビ桜が」

「何だと・・・弱虫恭哉のくせに」

「やるか」

「かかてこい」

「ふっ二人とも・・・喧嘩はだ『うるさい！黙ってろ、一夜』『ひい』」

一夜は情けない悲鳴を上げ、慧斗の後ろに隠れる。桜は恭哉は互いに睨みあい、いつでも動けるように構える。いきなり喧嘩をしそうな二人の間に慧斗が割り込み

「はいはい。喧嘩しないの」

「はい、慧兄」「ちっ」

桜は素直に従い、恭哉は舌打ちしながら歩いていく。腹いせに積もった雪を蹴り飛ばしている。恭哉はなかなかの低血圧らしいので朝はとっても機嫌が悪い。なので朝は触らぬ恭哉に祟りなして事で全員心得ている・・・のだが桜だけは全くわかってない。

「ふあゝあ。眠っ。そして寒い」

翔太がそう愚痴り、マフラーを弄る。龍護はそのマフラーを奪い

「これで眠気も吹っ飛んだだろ」

「寒っ・・・なにしゃがんだ！龍、さっさと返せ。凍え死ぬ」

「あつはつは。なにその格好・・・くっ苦し・・・」

来哉が翔太の格好を指差し大爆笑する。来哉が笑っている格好というのは、翔太が冷たくなっていく首に手袋を巻いて、その手袋についていた雪が背中に入り、暴れまわっていることだ。

残念ながらその行為は更に首の熱を奪っていくだけだった。

千夏が心の底から呆れたようにはあゝとふかゝいたため息をつく。ダメな兄を持つと妹はいろいろ大変だな。

「お兄ちゃん。みつともないから暴れまわらないで。龍護兄から奪い返せば良いじゃん」

「そうだね。それがあつたが」

「今頃かよ」

「気がつかなかったんだ・・・逆にそっちに驚きだよ」

慧斗は苦笑いを浮かべ、頭を掻く。

あつかんべゝをし、自分の尻を叩いて翔太を挑発する龍護。もともと気が短い翔太は容易くこの挑発に乗った。

「ボッコボコにしてやる！」

龍護と翔太の追いかけっこが始まり、来哉は「俺も入れてゝ」と言

い、追いかけてここに途中参加。慧斗は唇の端を引き攣らせながら「はあく、結局こうなっちゃうわけね。朝っぱらから元気すぎでしょ」

「慧斗は混じらないのか？」

恭哉が慧斗を見上げる。慧斗はうぐんと唸り

「混ざってもいいんだけどね。俺はどっち側につけば良いのか迷うからさ。中立を貫こうかな」と

それに喧嘩も暴力も嫌いだし、と付け加える。桜は目をキラキラさせながら慧斗を見つめている。憧れの男性を見る少女のようだ。まんまなんだけどね、桜は。

美優と千夏は顔を見合わせ、やれやれと首を振る。

あの頃は全てが輝いて見えた

キラキラと輝き、一瞬で消えてしまう色とりどりの打ち上げ花火その一瞬を少しでも長く楽しもうとはしゃいでいた毎日

あの日までは・・・

「では今日から冬休みです。怪我をしないようにね。解散」

先生の声で生徒達は各々の計画を友達と一緒に話し出す。桜達は素早く鞆を背負い、教室から出る。いつものあの秘密基地？へ行くのだ。

「おい、さつさと走れよ。のろま」

「黙れ、アホなす」

言い合いながらとんでもないスピードで走っていく二人。その後を美優と千夏と一夜が追いかける。下駄箱で上履きを脱ぎ、恭哉が靴を出そうと開けると

ドサドサドサ

山のようなラブレターが雪崩のように落ちてきた。桜は引き攣った笑みでそれらを眺め、一言

「いつもの事だけど龍兄と慧兄と翔兄と来兄に負けず劣らず凄い人

気だね。また全部捨てんの？」

「俺には好きな奴がいるから。そいつ以外眼中にない」

きっぱり言い切り近くにあったゴミ箱に捨ててく恭哉。千夏が小声で「読む位してあげても・・・」と言っているが無視する。

「さっさと行かないと兄貴達に怒られるな」

「そだね。行こう」

「おっ来た来た。おい、こっちだ」

ここは廃ビル。何十年も前に使われなくなった人の寄り付かない場所だ。子供にとっては遊び場所以外の何物でもない。

「今日はなにして遊ぶ？かくれんぼ？鬼ごっこ？」

翔太は鞆をそこらに放り投げながら皆に聞くと、桜が元気よく手を上げ

「両方合わせて隠れ鬼」

「決定」

てなわけで、鬼が一夜と千夏。隠れる方が桜、美優、恭哉、来哉、慧斗、翔太、龍護という面子だ。隠れる方は早速逃げる。鬼は一分待ち、探し始める。

一時間後。龍護、慧斗、桜以外の全員が見つかり、鬼は集まって作戦会議開始。

「どうする？あの三人ホントに隠れるの上手いよね」

「でも隠れられそうなどこ全部探したじゃん。いったいどこに隠れるって言うのさ」

「そんなの本人に聞きなよ」

「その本人が見つからないから今ここで言い合いしてるんじゃないの？」

「確かに」

「おい。何だ、お前ら」

後ろを見ると、高校生ぐらいの男数名が偉そうに立っていた。

恭哉と来哉と翔太はうざそうに顔を顰める。あからさまに嫌そうな

表情だ。美優と千夏は少しも動じず、お茶を飲んでいる。一夜はあわわしている。見ていて可哀想なほどだ。

「ここは俺らのたまり場なんだが、なんでここにこんなガキがいるんだ」

男その一はペツとつばを吐き、上から見下ろす。翔太は拳を握り締め、喧嘩を売る。

「お前らこそなんなんだよ！ここは俺らの遊び場だ。さっさと出てけ。デカブツ」

「何故デカブツ？そこまで大きくないと思うけど。まっ、同意見だよ」

「デカブツじゃねえよ。高校生様だ。年上には敬意を払え。クソ餓鬼共」

「高校生？腕試しにはちょうどいい相手だ。見掛け倒しじゃないことを祈るよ」

来哉と恭哉がポキポキ指を鳴らしつつ不敵な笑みを浮かべる。喧嘩に関して言えば彼らの右に出るものはいない。少なくとも中学生の不良は今まで何度も叩きのめしてきた。

翔太は携帯を取り出し、まだ見つかつていない三人にメールを送る。来哉は美優と千夏を後ろに下からせる。この二人に怪我させたら後々面倒な事になる。約一名が烈火の如く怒り狂うのが容易に想像できる。一夜がその二人の前に立つ。

「餓鬼のくせに俺らに勝てると思ってんのか！？」

男その一は携帯を弄っている翔太に殴り掛かる。顔には「余裕」と書いてあり、自分がやられる可能性などこれっぽっちも考えていないようだ。

翔太は男その一の拳をまったく見ずに避ける。高校生達の顔に驚きが宿る。

「遅すぎる。龍の拳の方が千倍速いっ！！」

叱声と共に蹴りを放つ。蹴り足は正確に男その一の腹に命中。男その一は腹を押さえ蹲る。苦しげに咳き込む男その一を見、高校生達

はぽかんとしている。目の前の現状に頭が追いついていないらしい。それもそうだろう。

おそらく、この高校生達は今の今までは無敵を誇ってきたのだろう。それなのにこんな子供にたった一撃でやられるとは夢にも思わない出来事だった、というところかな。

「弱いっ。それでも高校生かよ。体ばっか大きuktatて意味ないんだよ」

よく通る声で言い放つ。来哉は何がおかしいのか大爆笑している。

「なっ何なんだ・・・こいつら」

高校生達はざわめきつつ一歩後ずさる。そこへ

「翔、こいつらか？俺らの邪魔する奴らってのは」

「わぁゝい。喧嘩だ、喧嘩」

「桜、喧嘩ぐらいでそんなにはしゃがない」

龍護達だ。来哉は腰に手を当て、早速文句。

「遅い。どこに隠れてたんだよ、ったく」

「お前には一生わかんない場所だよ」

龍護は挑発的に言い、来哉は「あゝあ」と額に青筋を浮かべている。ぎゃあぎゃあ罵り合いながら喧嘩勃発。翔太も加わり、大変やかましい。

「はいはい。お静かに、三人とも」

慧斗が三人の頭に順に拳を落とす。

「痛つつて」×三

三人は頭を押さえ、しゃがみ込む。痛みが治まってきたら、猛然と抗議する。

「なにしゃがんだ！慧斗ッ！」

「喧嘩売ってんのか？」

「ぶん殴ってやるっ」

三人の抗議を軽く聞き流し、慧斗は高校生に向き直る。そして人当たりのよい笑顔を浮かべて

「素直に退いてもらえませんか？俺らが先に来て遊んでいたの」

「退く訳ねーだろ」

男その二は慧斗に襲い掛かる。どうせ「ひ弱なこいつなら倒せる」
とでも思っているのだろっけど……。

「残念です」

ふうとため息をつき、慧斗は男の目を見据え、拳の軌道をそらす。

男その一は「な・・・に・・・」と驚きの声を漏らす。慧斗はそのまま男の足を払いバランスを崩すと、担ぐようにして背中越しに投げる。男その一の体は綺麗に回転し、コンクリートの床に叩きつけられた。

第十二章 兄妹の思い

「が・・・はっ」

男その一は口から血を吐きピクリとも動かなくなった。気絶したらしい。慧斗はパンパンと埃を払い、何事もなかったかのようにニコツと微笑む。その笑みはいつも小学校の女子を惹きつける魅力的な笑みだ。簡単に言うくと三珠小学校の四分の一の女子をオトした笑みだ（本人無自覚。ゆえに余計にたちが悪い）。龍護曰く、「慧斗は年齢を問わず女性を惹きつけるタイプ」らしい。

恭哉がひゅーと口笛を吹く。さすが慧斗。

高校生達は顎が外れそうなほど口を開き、驚きを露にする。

「お一人様、おーしまい。だね」

龍護は笑いを噛み締めつつ宣告。来哉は慧斗の肩を抱き

「人を見た目で判断しちゃダメだよ。こいつ、俺らの中で一番強いから」

「慧兄、カッコいい」

瞳をキラキラ輝かせ、桜が手を叩く。慧斗は桜の頭に手を乗せ、嬉しそうに破顔する。妹に褒められるのは嬉しいみたいだ。

「ちっ・・・くしょお」

男その三、その四が同時に桜目掛けて走ってくる。女なら、と考えたのかな？

「でも」翔太が小さく呟く。

彼らはわかってないのだ。来哉が言った意味を。

「桜は」恭哉が軽い口調で歌うように続ける。

桜は流れるような動作で男その三の蹴りを避け、男その四のパンチをかわす。まるで踊っているみたいに軽やかに。

「俺らの中で」来哉が腕を組み、慧斗に寄りかかりつつ哀れみの眼差しを送る。

男その三、その四目が泳いだ隙を見逃さず、桜は深呼吸をする。

「かなり」龍護が暇そうに欠伸をする。

「はッ」

裂帛の気合と共に男その三の腹に蹴りを入れる。そして軸足を変え、反対の足で男その四の男の急所部分を蹴り上げる。蹴り足が霞んで見える蹴りを、容赦なく、思いつきり。

「強いんだなあ」慧斗が苦笑しつつ締め括る。

ドサドサ

「あれ？もう終わり？一夜より弱いじゃん。準備運動にもならない」息一つ乱さず腰に手を当てる桜。

「いや、一夜も結構強いぞ。気が弱いだけで」

恭哉がな、と一夜に問いかける。一夜は「そっ・・・そんな。僕なんか弱すぎていつも皆にやられてるよ」と小さな声で言っている。

「だから言っただじゃん。人は見た目で判断しちゃダメだって」

来哉がやれやれと肩を竦める。慧斗は桜の頭を優しく撫でて

「すごいじゃん、桜。今の蹴り足、俺でも目で追えなかったよ。俺が教えた技、もう使えるようになったんだ」

「まだまだだよ。私、もっと強くなって皆を守りたいんだ」

綺麗な笑みを浮かべ腕を叩く桜。残された高校生六人はいつせいに襲い掛かって来た。最初に倒れた男その一が復活したから七人か。

桜達は毎日喧嘩し合って鍛えた動きで高校生を圧倒する。

「くそっ」

男その六が折りたたみ式ナイフのようなものを取り出す。それにならい、他の高校生達もナイフやカッターや金属バットを出す。

「刃物か・・・厄介だな」

七人は背中合わせになりながら顔を合わせる。汚い奴らめ。

「じゃあ俺らも」「本気で行きますか」「賛成」「ぼっ・・・僕、緊張してきた」「大丈夫。一夜なら出来るよ。自信持ちな」「桜、どっちが早く倒せるか競争な」「いいよ。恭哉には負けない」「言ってる」

七人は落ちている鉄の棒を拾い、構える。桜達は全員、自分の身を

守る護身術の類は一通り叩き込まれている。しかも実際に毎日バシバシと使われている。そんなじゅうそこの子供と思っていれば、痛い目を見ること間違いなし。

「おりゃあ」

高校生達が斬りかかってくる。それを受け止め、弾き返し、反撃する桜達。

「へえ、これがナイフか。ちっちゃい刀だね。こんなでホントに斬れるわけ？」

「桜！一夜を・・・」

慧斗の焦ったような声が響く。視線を向けると、一夜が床に倒れている。頭から血を流していて、相手は一番大柄でいかにも悪そうな奴だ。こいつがリーダーだろう。男その十としておこう。

「一夜ッ！」

美優と千夏の叫びが反響する。桜は渾身の力で男その七のナイフを押し返す。慧斗達はそれぞれの相手に押さえ込まれている。いくら武術に長けていても筋力が違いすぎるのだ。五人とも必死に耐えている。

桜は一夜目掛けて振り下ろされた金属バットを、すんでのところで受け止める。のはいいが、ぐいぐい押してくる馬鹿力に歯を食い縛る。なんて力だ。

「後ろ！」

翔太の警告する声が耳に届く前に後ろを見る。男その七が迫ってきている。この体勢じゃ、避けられない。桜は一夜に呼びかける。

「一夜、あいつのナイフ、止めて。私は、この男のバット押さええているだけで、精一杯なんだ」

「わっ・・・かった」

一夜は血が目に入らないように片目を瞑ったまま体を起こし、男その七の刃を受け止める。僅かな幅しか持たない鉄の棒で刃を受け止めるとは、さすがだ。そして鉄の棒で相手のナイフを絡め取り、弾く。そのままの勢いで相手の腹に鉄の棒を叩き込む。「てめえら・・・」

・。調子に、のんな！」

一夜を蹴り飛ばし、桜の胸倉を掴み持ち上げる男その十。桜は呼吸が上手く出来ず、男の手を引つ掻くがまったく効果なし。

「く・・・っ・・・そ・・・離・・・っ・・・」

桜が苦しげに顔を歪ませる。

「桜っ！」

慧斗の声が遠くから聞こえる。

「桜を・・・離せッ！」

「いいぜ」

男その十は桜の胸倉を掴んだまま窓の外に手を出す。その後何をする気なのかは全員、嫌でもわかった。「まさか・・・」

「離してやるよ」

『っ・・・やめろおおおッ！！！！！！』

慧斗達の絶叫が木霊す。男その十は残酷な笑みを浮かべ、手を離す。ここは五階。よほど運がない限り、死は免れない。慧斗が男その八をふっ飛ばし、走る。だが、到底間に合う距離じゃない。

ガシッ

桜が必死に手を伸ばし、窓枠を掴む。

「ちッ、しぶてえ餓鬼だな」

男その十は桜の手を窓枠から無理矢理引き剥がす。その隙に慧斗は男その十の顎に一発入れ、桜に手を伸ばす。

「桜、掴め！」

「慧兄・・・！」

桜が空に手を伸ばす。慧斗は限界まで身を乗り出し、手を伸ばす。伸ばした手が一瞬指先に触れて、しかし届かず空を掴む。いや、届かなかったのではない。桜が自分の意思で手を引いたのだ。慧斗と一緒に落ちないように。

「こんなときまで・・・人の心配してんなよ」

乾いた笑みと共に慧斗は窓枠を蹴り、外に飛び出す。

心に浮かぶのは、いつも自分の後を追ってくる小さな妹の笑顔。

—— 守りたいんだ。 あいつは俺の大事な…… 誰よりも大切な…… この世にたった一人しかいないっ…… 俺の、妹なんだ

『それが、そなたの望みなら』

再び伸ばした手は、桜の手を掴み取る。そのまま桜を抱きしめ落下していく。その二人を真紅の光が包み込む。それと同時に、慧斗の胸元から淡い光が溢れ出す。

「俺が、護る」

龍護達が下を覗き込んだとき、慧斗の姿だけがなかった。

「美優と千夏は救急車を呼べ。来哉は親父達に連絡を」

翔太が指示を出す。その指示に従い、それぞれが動く。高校生達は全員叩きのめしてある。邪魔する者はいない。

残った桜達は慧斗を探すことになった。だが、影も形もなかった。残ったのは“空の珠”のみ。

どくん

桜の体内で何かが脈打つ。瞳から一粒の涙が零れ落ちる。

私のせいで、慧兄は……

桜の中で何かが壊れる音と共に、抑えきれない感情が、揺れる。

あの時、慧兄の手を掴んでいたらこんなことには……

私の、せいだ。

どつくん

桜の真紅の瞳がひび割れる。

「まずい。桜の力が……」

兄の死を引き金に、まだ眠っていないなければならないはずの力が目覚めかけている。

「ダメだ！今のお前がその力を使ったら……」

命の全てを力に吸い取られてしまう。

桜を中心に地面が陥没し、すさまじい炎の暴風が吹き荒れる。近く

にいた龍護達は慌てて遠ざかる。今の桜にこの力はコントロール出来ない。近くにいたらこっちまで巻き込まれる。

「あつ・・・」

これが桜の力か。全てを焼き尽くし、浄化する劫火。“空の珠”から光が進る。その光が炎を包み、消滅させる。そのまま桜をも包み、力を抑え込む。

「ど・・・どうなった・・・？」

恭哉が啞然としている。翔太と龍護も目を瞬くしか出来ない。桜はぐらりと崩れ落ちる。

「“空の珠”が桜の暴走を止めた・・・？そんな話、聞いたことないけど」

その後、親父達が迎えに来て、一夜は病院に運ばれた。慧斗の事は、今でも探しているが、今のところ見つかっていない。

第十三章

「来哉、元気にしてっかな」

重い沈黙を破ったのは翔太の声だった。龍護は懐かしそうに目を細める。あいつならどこにでも溶け込めるだろう。

あの事件の後、来哉は転校してしまったのだ。弟の恭哉は天空家に残ることを選んだ。

「あいつの事だ。元気にやってるだろう」

「クソ兄貴なら元気だよ。毎週手紙来てるし」

恭哉は不機嫌丸出しの顔でぼそりと呟く。龍護と翔太は同時に吹き出す。

「お前らまだ兄弟仲悪いのかよ」

「ダメだな、まったく」

「うつせ。兄貴とはなんとなく合わないんだよ」

ちつと舌打ちする恭哉。美優がお茶を一口飲み

「あなたが一方的に嫌っているだけでしょ」

凶星のようで美優を睨みつける。龍護は桜が去った方を見つめて吐息のような声を漏らす。

「桜・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6534w/>

珠巡り

2011年11月25日20時57分発行